

第41回「若鮎祭」を終えて

第67回 西日本医科学学生総合体育大会

新任教員紹介

海外自主研修

ヨット部による追悼慰霊式

平成27年度

若鮎祭特集

夏の課外活動



【メインテーマ】 若鮎祭特集・夏の課外活動

トピックス

- 01 You cando it! ～第41回「若鮎祭」を終えて～ 実行委員長 医学科第4学年 谷村雄太
03 「若鮎祭」実行委員の感想
06 平成27年度 学生表彰
08 第67回 西日本医科学生総合体育大会

新任教員紹介

- 09 医療文化学講座(文化人類学) 教授 兼重 努
10 病理部 准教授 森谷 鈴子
11 分子神経科学研究センター 神経難病病因学分野 准教授 柳沢大治郎
12 総合外科学講座 教授 目片英治
13 産科学婦人科学講座 准教授 木村文則
14 整形外科学講座 教授 今井晋二
15 生命科学講座(化学) 教授 古荘義雄

図書館からのお知らせ

- 16 著作権講座(その2)
18 大人のビブリオバトル
19 Library Book Bazaarを開催しました!!

キャンパスライフ

- 20 研究医養成コース活動紹介 社会医学講座(法医学部門)編
22 海外自主研修
 チョーライ病院での自主研修報告 医学科第4学年 岡本裕哉
 ジョンズ・ホプキンス大学で過ごした夏 医学科第4学年 橋場奈月
 グアテマラでの学外臨床実習を終えて 医学科第6学年 大橋瑞紀
 (官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム～)
 シンガポール留学記 医学科第6学年 細尾真奈美
 マレーシア海外研修での学び 看護学科第4学年 塚久美子
32 平成27年度 滋賀医科大学奨学金奨学生の決定
34 ヨット部による追悼慰霊式
 2015年 嶋岡さん追悼慰霊式 医学科第3学年 ヨット部主将 小杉和希

インフォメーション

- 35 平成27年度第1回学位授与式
36 平成27年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに
 平成27年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式
39 第41回 解剖体慰霊式
39 平成27年度 研究動物慰霊式
40 研究医養成コースのご案内

トピックス

Topics

You cando it!

～第41回「若鮎祭」を終えて～

第41回若鮎祭実行委員会委員長
医学科第4学年
谷村 雄太



You cando it! 自分のあだ名が盛り込まれたテーマを掲げた若鮎祭が終わりました。両日とも天気恵まれ、まさに祭り日和の中、第41回若鮎祭を開催することができ、とても感動しています。

幹部学年の色を大きく反映する若鮎祭。先輩方の作り上げてきた若鮎祭は、年ごとに違った趣向を凝らし、大成功を取っていました。「今年の若鮎祭は、どんなものになるのだろうか?」「自分の学年は、誰が委員長を引き受けるのだろうか?」、そう思っていた矢先、私のところに前体育会長から委員長にならないか、という話が舞い込んできました。

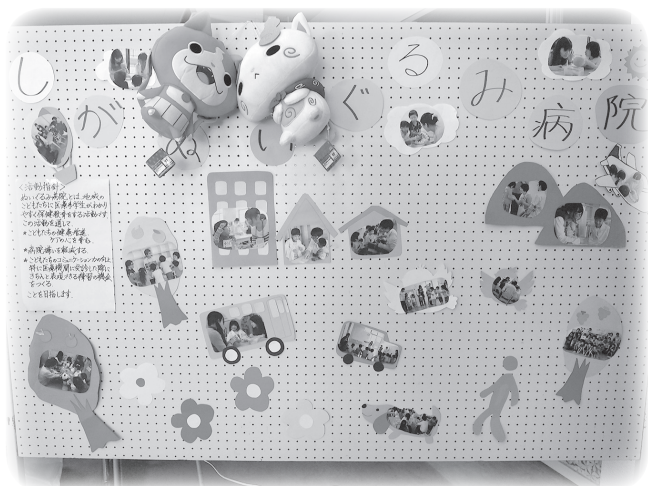
私には皆を統率できるような人望があるわけでもなく、他に適任者がいるのではと考え、一度は断りました。しかし、私が断った後もなかなか委員長が決まらず、彼が私のところへ再度依頼に来たとき、委員長を引き受けました。

なぜ私がこのとき委員長を引き受けたかという、今年の若鮎祭がどんな色に染まっていくのか、委員長

として見届けてみたい、また、人生で一度しかない若鮎祭実行委員長になるチャンスを逃してしまっただけで後悔すると思ったからです。

You cando it! 表向きには can と do のスペースを埋めることで、「あなたはできる」と「感動できる」の二つの意味を込めたということでしたが、冒頭でも





ちらっと書いた通り、この題には三つ目の意味で私のあだ名が含まれていました。自分のあだ名が題に盛り込まれることには最初は抵抗がありましたが、「自分是可以する！」と私自身を奮い立たせる意味でもこの題にしてよかったなと今では思います。若鮎祭を終えた後も、この題がみなさんの記憶に残り、みなさんを奮い立たせてくれていたら、私としては本望です。

若鮎祭を終えた今、思うことは、「あの時、委員長を引き受けてよかったな」ということです。委員長として至らないところはたくさんありましたが、執行部をはじめ、実行委員会のメンバーが支えてくれたおかげで、最後まで役目を果たすことができましたと感じています。企画の調整で深夜遅くまで学校に残り、一緒に考えてくれたメンバーもいました。若鮎祭当日のギリギリまで大変なことが続きましたが、乗り越えること

ができたのは素晴らしい仲間のおかげです。

最後となりましたが、塩田学長、堀池副学長、松末病院長をはじめとする大学、病院の教職員の皆様、永田学生生活支援部門長をはじめとする学生生活支援部門の先生方、湖医会をはじめとするOBOGの皆様、協賛して下さった企業の皆様、若鮎祭に参加して下さった方々、私を委員長に推挙して下さった赤井前委員長、そして医学科4年、看護学科2年の実行委員の皆さん、本当にありがとうございました。

第41回若鮎祭は、皆様のご理解、ご協力のおかげで無事成功を収めることができました。これからも続く若鮎祭が、ますます発展していくことを願い、私の文章を終えたいと思います。ありがとうございました。



「若鮎祭」実行委員の感想

副委員長 医学科第4学年 **勝沼 倫子**

若鮎祭を終えて

今年もついに若鮎祭が終わり、気づけば秋も中頃に入っていたことをひしひしと感じています。あつという間の半年間で、とても充実した時間でした。特に若鮎祭に近づくにつれ忙しいながらも実行委員が一体となってこの一大イベントを作り上げていく感じがとても良いものだなと思いました。今回副委員長として若鮎祭に関わり、思っていた以上に多くの人の努力があって若鮎祭が成り立っていることに気がきました。実行委員の皆さんそしてお力添えくださった全ての皆様に厚く御礼申し上げます。

副委員長 医学科第4学年 **杉本 陽**

地域イベントとしての若鮎祭

若鮎祭実行委員会副委員長の1人として、第41回若鮎祭の運営に携わらせていただきました。一学生として、過去3度の若鮎祭を経験してきましたが、運営を行う立場となった今回、地域の方々の存在をより一層大きく感じました。今までは、来場された方々と構内ですれちがうくらいの関係でしたが、我々の当日の主たる業務は受付であったので、来場された方々と接する機会がたくさんありました。ご質問に対応させていただいたり、道案内をさせていただく中で、様々な企画を楽しみにしてくださっていることを実感し、たいへん喜ばしいものでありました。地域の方々に足を運んでいただける若鮎祭であり続けていきたいと感じました。



副委員長 医学科第4学年 **樋上 明音**

若鮎祭を終えて

若鮎祭が終わり、大学もめっきり静かになってしまいました。今は無事に若鮎祭を終えることができたことに対する安堵と充実感でいっぱいです。若鮎祭の成功を目指し、実行委員全員と準備に明け暮れていた日々が懐かしく感じられます。副委員長の一番大きな仕事は、各局のサポートでした。様々な局のお手伝いをしていたので、各局の実行委員の若鮎祭に対する情熱を一番近くで感じられたように思います。素敵な若鮎祭にしたいという実行委員全員の思いが結実した若鮎祭に副委員長として参加することができ、本当に嬉しかったです。

最後になりましたが、若鮎祭に関わってくくださったたくさんの皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。来年の実行委員の皆さんも頑張ってください！

副委員長 看護学科第2学年 **石川 里奈**

若鮎祭を終えて

今回、副委員長という立場で若鮎祭の運営に携わらせていただきました。自分たちの手で一から作った若鮎祭には思い入れが強く、フィナーレを終えた際には泣きそうになりました。多くの方に「若鮎祭、良かったよ。」と言ってもらい、言葉には表せないほどの達成感を味わいました。この若鮎祭を通して、私は多くのものを得ることが出来ました。もし副委員長を決めるあの日にもう一度戻ったとしても、私は迷わず副委員長に立候補すると思います。それぐらいやりがいのあるものでした。

最後になりましたが、若鮎祭の運営のために関わって下さった全ての方に心より感謝申し上げます。



副委員長 看護学科第2学年 **兼田 瑞希**

若鮎祭を終えて

私にとって今回、2回目の若鮎祭は1回目とは大きく異なったものでした。去年は若鮎祭がどのようなものかも分からないままKOEの練習をして、当日も流れに身を任せたまま終わってしまいました。

しかし、今年は3月に始まり、テーマ決めから関わらせていただき、各局の動きを知り、若鮎祭がこんなに早くから多くの人の努力や協力のもと開催されているということを実感しました。当日はやはりあつという間でしたが、とても楽しむことができました。

私は大した仕事はしていませんが、こんなに楽しい若鮎祭になったのは優しく接して下さった執行部、実行委員の先輩方のおかげです。副委員長を務めて本当に良かったです。皆さん本当にありがとうございました。



会計 医学科第4学年 **丸田 祥平****素晴らしき哉、青春！**

まだ薄暗い朝6時、中庭に転がっている空き缶を拾う。若鮎祭が嵐のように過ぎ去った。イレギュラーは当たり前。訳も分からず必死に対処する執行部メンバー。ケータイの通知音は最大に設定してある。

これまで会議を幾度となく重ねてきた。一昨日は夜三時まで会議。昨夜も0時まで中庭巡回。寝不足の目に朝日が容赦なく突き刺さり、また空き缶に手を伸ばす。委員長が言う「中庭に水まいてブラッシングだ！」。

皆、持ちなれたデッキブラシでタイルをこする。終わりが近い。これが僕らにとってのフィナーレである。副委員長樋上が叫ぶ「スニーカーのソールが取れた！」。

第41回若鮎祭は僕らの青春として心に残り続けるであろう。さあ、次のデッキブラシを持つのは君かもしれない。

ステージ局長 医学科第4学年 **丹波 佑斗****CANDOのステージ**

今年の若鮎祭ステージ局長は例年にもまして個性ある人たちが集まったと思います。それぞれが思い思いのステージを作ろうとしており、若鮎祭に向けて動き出した時から今回の若鮎祭ステージはどんなステージになるのかワクワクしていました。しかしそんな個性ある局長はなかなかまとまらず、一時はステージ局長を引き受けたことを後悔しそうにもなりました。しかし若鮎祭が近づくにつれみんなの連携もうまくとれるようになってきて、当日のステージでは初めてステージ局の全てがつながり、一つになっていました。それもこの上なく最高のステージになったと思います。

「今年のステージ局は大変だね」と言われ続けていましたが、最後には全員で最高のステージを作りあげました。まさに全員で“CAN DO”を証明し、“Cando（感動）”を皆さんに届けることができたと思います。

ステージ局副局長 看護学科第2学年 **木下彩季乃****若鮎祭を終えて**

私は今回、実行委員として若鮎祭に携りました。そのおかげで、昨年はひたすらにカレーを売ったり、色々な企画を見て回ったりして初めての若鮎祭をただ楽しただけだったのですが、その裏では、皆が楽しめるようにそして円滑に運営できるようにするために、多くの人が動いて下さっていたのだということを知りました。また、ステージ局の副局長として実行委員の話し合いにも参加させてもらって、様々な方からのサポートを受けながらも、自分たちで考えを出し合ったり自ら行動を起こしたりして、「学生が主体となって素晴らしい若鮎祭を作り出そう」という雰囲気を間近で実感することができました。貴重な経験ができて良かったと思います。

企画局長 医学科第4学年 **播谷 美紀****ノンストップで駆け抜けた8ヶ月**

2月中旬に企画局局長になってから早8ヶ月。講演会班、講義室班、食堂班、駐車場・全体班、体育館班の計5班を取りまとめてきました。地域住民の方々、学外の学生などターゲット層が幅広いため、2次企画書までとことん練り上げました。また、イベントによって講演会の先生方、外部企業の方々、そして協賛企業の方々との調整もあり、普段学生としてはできない経験を沢山することができました。若鮎祭当日も、どのイベントも大盛況で嬉しかったです。1人では到底できないことを企画局員のみなを始め、広報局や総務局といった他局や執行部と一致団結して作り上げることができたと実感しています。とても貴重な経験でした。ありがとうございました！

企画局副局長 看護学科第2学年 **久保 恵佳****若鮎祭を終えて**

私は、今回の若鮎祭に企画局の副局長としてだけでなく、企画局の会計としても関わらせていただきました。企画局では、縁日などの様々な企画を計画し行います。その中で、私はどの企画にもサポートするという立場で関わらせていただきました。私に至らない部分が多くあり、局長をはじめ班長さんや局員の皆さんにご迷惑をおかけしましたが、皆さまの協力のおかげで、副局長と会計の仕事が無事に終えることができました。

若鮎祭の開催には、多くの方の努力と協力があることを知り、自分もその一員として関わられたことをうれしく思い、とても貴重な経験をすることができたと感じています。企画局の局長さん、班長さん、局員の皆さま本当にありがとうございました。

広告局長 医学科第4学年 **曾根 久智**

始めにこの誌面をお借りしまして、第41回滋賀医科大学若鮎祭にご賛同、ご寄付および広告掲載いただきました方々に厚く御礼申し上げます。我々広告局は広告掲載契約を皆様と結ぶことを通じて、改めてこの若鮎祭が皆様に支えられていることを実感しております。皆様に頂きました激励とご意見をもとに、来年の若鮎祭にもつなげていきたいと思っております。ぜひこれからも若鮎祭を宜しくお願い致します。

さて、私事ですが3回生の終わりに広告局長を引き受け、あっという間に7か月が過ぎました。一緒に仕事をしてくれた局員の皆さんには迷惑をかけたことも多々ありましたが、どうにか無事終わらせることができました。こつこつと仕事をこなしていった皆さんに、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



広告局副局長 看護学科第2学年 **橋本亜沙美**

若鮎祭を振り返って

広告局では、医学科看護学科、皆で仲良く作業することができました。私が一番苦手だったことは電話対応です。最初の頃は慣れず、企業や医院の方々に上手く説明することができませんでした。しかし、先輩方は「電話がけ、ありがとう!」と優しく接してくださり、その言葉を聞く度に次は頑張ろうと思うことができました。また、広告局では電話対応以外にも訪問や郵送などを行いました。その中では初めてのことも多かったのですが、挑戦していく中で様々なことを学ぶことができました。一方で、本当に上手くいくのか、きちんとした広告が作れるのかという不安もありました。そのため、学園祭のパンフレットの広告欄を見たときはとても嬉しかったです。今回、実行委員として若鮎祭に関わることができて良かったです。ありがとうございました。

広報局長 医学科第4学年 **夜西 麻椰**

第41回若鮎祭を終えて

局長に任命されてから半年間、部活でも幹部をしながら大変な時期もありましたが、無事若鮎祭を終えることができ安堵に包まれています。大変な時期を乗り越えることができたのは、実行委員をはじめ、班長さん、局員、そして温かい声をかけてくれた医学科同回生のおかげだと感謝しています。

今年は例年以上の来場者数を記録しました。広報局として、多くの方々に若鮎祭に足を運び様々な企画を楽しんでいただけたことを、たいへん喜ばしく思います。

最後になりましたが、第41回若鮎祭を開催するにあたりご寄付を頂いた方々、お力添えいただいた学生課職員の皆様、地域の方々に感謝申し上げます。来年の若鮎祭も今年以上に盛り上がりませうお祈りしています。



広報副局長 看護学科第2学年 **宮崎 晴菜**

私は他の局の副局長より仕事に取り掛かるのが遅く局長さんに迷惑をかけてしまったので、フィナーレのとき実行委員としてステージに上がっても良いのだろうかと思っていました。ですが、実行委員としてステージに上がったとき広報局の副局長で良かったと感じました。しかしそれと同時に反省の気持ちも大きく複雑な気持ちでした。実行委員の一員として仕事をさせてもらって感じたことは、与えられた仕事は自分がどんな状況にあっても責任を持って最後までやりきるということです。今回はたくさんのまわりの方に迷惑をかけてしまいましたが、今までと同じように接してくださり良い先輩方に囲まれていたなと今になってわかりました。この反省をこれからに生かしていきたいです。

総務局長 医学科第4学年 **五島 隆太**

学生を信じる最後の砦

第41回若鮎祭開催にあたり、ご支援・ご協力くださった方々に御礼申し上げます。何よりも事故や怪我など誰かが悲しむようなことがなく、充実した若鮎祭を成し遂げた達成感で胸がいっぱいです。



私が所属する総務局という部署は、若鮎祭の運営に於いて各模擬店や展示団体の学生代表との窓口となります。ここでの約束や連絡事項が若鮎祭当日の運営に大きく影響するので、総務局員一同で彼らとのやり取りに傾注致しました。しかし、どれだけこちらが伝えたと思っても、実際に各団体で約束事を守っていただかなければ無意味です。それ故に、最後は信じるのみでした。一般に、学生はマナーが悪いと決めつけられてしまいます。しかし、多くの学生はしっかり約束を守っていたと感じました。非難的になりやすい学生を最後まで信じ続け、一方で集団から生まれる悪意には厳正に処罰し、全体運営を守る重要な責務を負っていたと振り返り思いました。この若鮎祭の運営に携わり、他人に奉仕する大変さと充実感を体験できたことが私の最大の報酬です。このような貴重な機会をくださり誠にありがとうございます。

たとえ、実際に各団体で約束事を守っていただかなければ無意味です。それ故に、最後は信じるのみでした。一般に、学生はマナーが悪いと決めつけられてしまいます。しかし、多くの学生はしっかり約束を守っていたと感じました。非難的になりやすい学生を最後まで信じ続け、一方で集団から生まれる悪意には厳正に処罰し、全体運営を守る重要な責務を負っていたと振り返り思いました。この若鮎祭の運営に携わり、他人に奉仕する大変さと充実感を体験できたことが私の最大の報酬です。このような貴重な機会をくださり誠にありがとうございます。

総務局副局長 看護学科第2学年 **森木 洋充**

体力勝負の学園祭

若鮎祭の実行委員として及ばずながら総務局の副局長を務めさせて頂きました。といっても大変な仕事は殆ど先輩方がやって下さり、専らサポートに徹しました。総務局は体力勝負の局と聞いておりましたが、大量の物品の準備、片付けや、寒空の中の駐車場警備、と中々大変なものでした。この学園祭でいくらか痩せたのではないと思う運動量で、色々な物運びました。

今年の学園祭では学園祭らしいことはあまり出来ませんでした。これもまた貴重な経験でした。裏方に徹する総務局の仕事は性に合っていたと思います。副局長という大役を頂き、学園祭運営に関わる機会を頂きありがとうございました。



平成27年度 学生表彰

10月24日(土)、第41回若鮎祭開会式終了後に中庭水上特設ステージで、滋賀医科大学学生表彰の表彰式が挙行了しました。

今回表彰を受けたのは、平成26年9月から平成27年8月までの間に優れた実績、評価を得た6つの個人及び団体です。

受賞者には塩田学長から表彰状と副賞が授与され、受賞者への祝辞が述べられました。

受賞者	受賞理由
医学科第6学年 野土 希実	Scientific Reports (2014) に掲載された論文 Prion protein- and cardiac troponin T-marked interstitial cells from the adult myocardium spontaneously develop into beating cardiomyocytes. の共著者となる研究成果をあげた。
医学科第6学年 西野 裕香	Scientific Reports (2014) に掲載された論文 Prion protein- and cardiac troponin T-marked interstitial cells from the adult myocardium spontaneously develop into beating cardiomyocytes. の共著者となる研究成果をあげた。
水泳部 医学科第2学年 古田 諒	第67回西日本医科学生総合体育大会 水泳部門 男子400m自由形で優勝した。
水泳部 山本 大雅 (医6) 吉武 倫太郎 (医4) 吉田 耕輔 (医3) 古田 諒 (医2)	第67回西日本医科学生総合体育大会 水泳部門 男子800mフリーリレーで大会新記録のタイムにて優勝した。
ヨット部	第67回西日本医科学生総合体育大会 ヨット部門で470級優勝の成績をおさめた。 第67回西日本医科学生総合体育大会 ヨット部門コメディカルレースでスナイプ級優勝の成績をおさめた。

博士課程の大学院学生によるポスター発表会の評価結果に基づく「優秀ポスター賞」の授与が学生表彰に先立ち行われました。

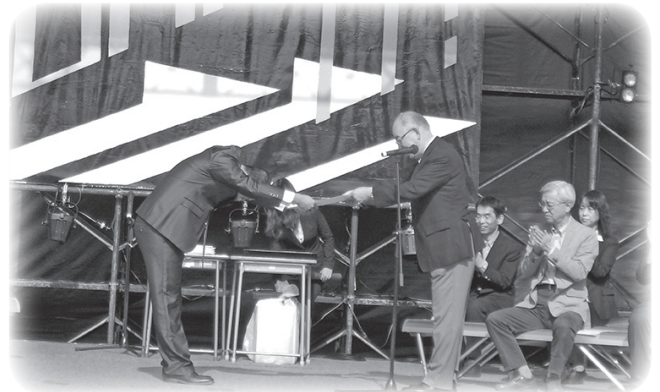
優秀ポスター賞	大学院(博士課程)第3学年 白 佳玉 (ばい じゃう)
---------	-----------------------------



学歌斉唱



学長祝辞



優秀ポスター賞 白佳玉さん

第67回 西日本医科学生総合体育大会

今年度の西日本医科学生総合体育大会（通称：西医体）は大阪市立大学を主幹校として8月に開催されました。多くの種目で8位以内の好成績をおさめ、総合においても全44校中10位と大変優秀な成績をおさめました。来年度のさらなる活躍を期待したいと思います。

クラブ名	種目	成績（ベスト8以上）
柔道部	男子団体戦	4位
ヨット部	470級	1位
	スナイプ級	6位
	総合	3位
	コメディカルレース スナイプ級	1位
水泳部	男子 50m 自由形	5位 山本 大雅
	男子 100m 自由形	4位 山本 大雅
	男子 200m 自由形	2位 古田 諒
	男子 400m 自由形	1位 古田 諒
	男子 100m バタフライ	4位 吉田 耕輔
	男子 200m バタフライ	3位 吉田 耕輔
	男子 200m 個人メドレー	8位 吉武倫太郎
	男子 200m フリーリレー	6位
	男子 800m フリーリレー	1位（大会新）
	男子 400m メドレーリレー	8位
	女子 200m 自由形	5位 中西 真由子
	女子 400m 自由形	3位 中西 真由子
	女子 200m 個人メドレー	6位 加藤 温奈
	女子 200m フリーリレー	4位
	女子 400m フリーリレー	2位
	女子 200m メドレーリレー	5位
		コメディカル大会 女子 100m 背泳ぎ
ボート部	男子シングル	2位
	女子クォドプル	3位
	女子新人クォドプル	2位
	総合	3位
ハンドボール部		3位
ソフトボール部		2位
陸上部	男子 3000mSC	3位 脇坂 穂高
	男子走り高跳び	6位 馬場 達也
	男子砲丸投げ	4位 林谷 俊和
	男子ハンマー投げ	3位 林谷 俊和
	女子砲丸投げ	7位 大沼 玲佳
	女子ハンマー投げ	3位 大沼 玲佳
バドミントン部	シングルス	2位 石原 晶子
	女子団体	ベスト8進出
空手部	男子組手新人戦	3位 北脇 大督

新任教員紹介

Newly-appointed
teacher introduction

医療文化学講座(文化人類学)

教授 兼重 努



2015年6月1日付で教授職を拝命いたしました。本学に助教授として赴任したのが2004年の4月1日。すでに11年あまりにわたって本学でお世話になっております。

私の専門は文化人類学です。文化人類学とは世間ではまだ知名度が低い学問かもしれません。大雑把に言うと、それは異文化を研究する学問です。

本学の学生は総じて基礎学力が非常に高く、本気でやれば文系理系を問わず、高い能力を発揮することが期待できます。しかし、医学は「理系」(自然科学)の学問なので「文系」(人文科学や社会科学)科目の素養は不必要と思いついでいる学生も散見されます。実に勿体ないことです。

「理系」の学問は、事物を自然の普遍的な法則性に結びつけて捉えようとする志向性が強いように思われます。しかし、普遍性だけでは人間は理解できません。人間は各々の地域文化、民族文化やサブ・カルチャー(後述)を背景に、多様な思考や行動様式を持っています。自然科学的思考の過度な信奉は、人間の思考や行動の多様性を軽視、捨象するという危険性を孕んでいるともいえるでしょう。

文化人類学は個別の文化の詳細な研究を通して、人類の文化の多様性と普遍性について検討することにより、「人間とは何か」という問いに文化の側面から答えていこうとしています。

本学の授業で私が特に強調しているのは、異文化は決して遠く離れた異郷だけにあるわけではなく、実は我々の身近なところにも存在するという事です。あ

る文化の大枠の中に属しながらも、他からはっきり区別された特徴をもった「小さな異文化」のことを文化人類学では「サブ・カルチャー」と呼んでいます。地域、年齢層、性別、職業・職能、宗教などの違いが、さまざまなサブ・カルチャーを生み出しているのです。

医療人は「医療文化」というサブ・カルチャーに属しており、医療の素人(患者)とは異なる、専門家集団特有の疾病観、身体観や生命観を共有しているといえます。同じく日本で生まれ育っていても、患者と医療人の両者は互いに異なるサブ・カルチャーに属しているのです。そして、その事実を互いに理解していないことこそが、両者の間にコミュニケーションの齟齬や不信感を生み出す要因のひとつとなっているのです。文化人類学の先行研究ではこのように指摘されています。

本学の学生は近い将来医療人として、異なるサブ・カルチャーに属している患者さんと日々接することになります。多様な思考様式・価値観や行動様式の尊重を旗印に、自文化を相対化することの重要性を提唱し、異文化理解の方法論を培ってきた文化人類学の重要度は医学教育においても高いはずで、文化人類学の素養を一人でも多くの学生に身につけてもらうことにより、良き医療人を育てる一助としたい一以上の願いのもと、これまで基礎学教育に携わってきました。

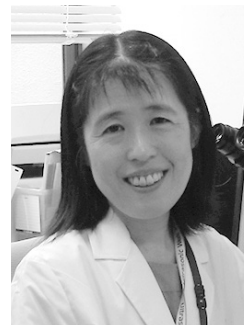
末筆ながら、教育、研究、大学運営において微力ではありますが、これから本学のお役にたてれば嬉しく思います。皆さま今後ともよろしくお願いいたします。

経歴

1986年 3月 京都大学 文学部文学科 卒業
1990年 3月 京都大学大学院 文学研究科 修士課程修了
1993年 3月 京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士課程修了
1994年 6月 中華人民共和国 広西壮族自治区 社会科学院 留学(1996年7月まで)
1998年 4月 滋賀大学 非常勤講師
1999年 3月 京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程研究指導認定 退学

2002年 4月 京都大学 非常勤講師
2002年 11月 京都大学 人間・環境学 博士学位取得
2004年 4月 滋賀医科大学 医療文化学講座 助教授
2007年 4月 滋賀医科大学 医療文化学講座 准教授
2015年 6月 滋賀医科大学 医療文化学講座 教授

病理部



准教授 森谷 鈴子

2015年6月1日付で、附属病院病理部准教授を拝命致しました。私は滋賀県出身で、学生時代に不思議なご縁で服部隆則前副学長（当時は病理学第一講座教授）とお知り合いになったのがきっかけで、京都府立医科大学を卒業後すぐに滋賀医科大学病理学第一講座に入局しました。

病理学第一講座（現病理学講座分子診断病理学）では、服部隆則前副学長、現分子診断病理学の杉原洋行教授のご指導で、主に胃癌の研究で学位を取得させて頂きました。現臨床検査医学講座の九嶋亮治教授には、兄弟子として病理診断学をはじめ、私の病理医人生の様々な場面で大変お世話になりました。他にも多くの先輩方、臨床各科からの大学院の先生方に温かくご指導・ご支援を頂きました。

病院の病理医になることは学生時代からの夢でしたが、卒後6年目に婦人科・乳腺病理学の大家でかつ診断病理学の有名な教科書を書かれた米国メリーランド大学のSteven G.Silverberg教授の下に留学する機会を得ました。そこでは、診断病理学の先進国での病理医の仕事を間近で見ながら体験することができました。

帰国後すぐに、済生会滋賀県病院に一人病理医として赴任しました。そこでの約2年間で、「臨床医としての病理医」に必要な基本的な心構えが自分の中に構築されつつあったと思います。その後不思議なご縁で、前任地である国立病院機構名古屋医療センター（旧国立名古屋病院）で12年間勤務しました。国立名古屋病院は、戦後まもなく一般病院に病理部門が設置され

た、いわば日本の病院病理部の先駆けのような施設です。上司で乳腺病理の大家である市原周先生をはじめ、臨床各科の先生方から病院病理医として大切な事を沢山学びました。名古屋医療センターでは診療科の垣根が少なく、横の繋がりを持ちやすい雰囲気がありました。その中で、病理医というのは最終診断を下す裁判官のような「上から目線」的存在ではなく、各科の先生方と互いに情報を共有しながら共に患者さんの診療に寄り添う一臨床医であると強く感じました。名古屋在籍中には、全国多施設の病理医と交流する機会も増え、病気を前に常に謙虚な姿勢で診断業務に取り組まれている尊敬すべき素晴らしい先生方と沢山お知り合いになることができ、病理医同士が互いの得意分野を生かして助けあう素晴らしさを知りました。

一年前、九嶋教授から大学に来ないかとお誘いを受けた時、大学志向の無かった私は正直、大変戸惑いました。しかし、一般病院という第一線の現場での経験は、「病院で働く病理医」の育成に少しは役に立てるかもしれないと思い、お受けしました。微力ですが、病理医の育成と各科と協力し合って診療に取り組む風通しの良い病理部作りをしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

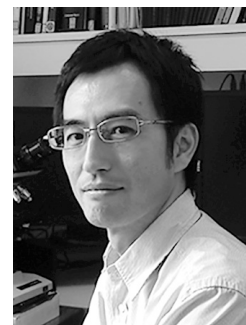
経歴

1994年 3月 京都府立医科大学 医学部 卒業
 1994年 4月 滋賀医科大学 病理学第一講座 大学院 入学
 1996年 3月 滋賀医科大学 病理学第一講座 大学院 中退
 1996年 4月 滋賀医科大学 病理学第一講座 助手
 1999年 8月 米国メリーランド大学 留学
 2001年 6月 済生会滋賀県病院 病理科 医長
 2003年 7月 国立名古屋病院（現国立病院機構名古屋医療センター）病理診断科

2015年 6月 滋賀医科大学 医学部附属病院 病理部 准教授

分子神経科学研究センター 神経難病病因学分野

准教授 柳沢 大治郎



2015年6月1日付で、分子神経科学研究センター・神経難病病因学分野の准教授に着任致しました。私は京都薬科大学を卒業して、そのまま大学院へと進学し、2008年3月に学位を取得しました。その後、分子神経科学研究センター・遠山育夫教授の許でポスドクになる機会に恵まれ、2012年に助教に、そしてこのたび准教授を拝命致しました。

滋賀医科大学には、学部時代には所属していたサッカー部での試合や薬剤部での実習、大学院時代は共同研究で来学する機会がありました。振り返ると滋賀医大とは15年以上の付き合いになります。

新任教員の挨拶ということですので、ここでは私のこれまでの経歴について紹介させていただきたいと思えます。先に記しましたように、私は京都薬科大学を卒業して大学院へと進学しました。所属した研究室では、脳虚血における神経保護をテーマとして、主に脳虚血モデルラットを用いた研究を行ってきました。研究は頭脳よりも体力まかせでしたが、修士2年・博士3年の5年間を経て、なんとか論文を出すことができました。ただ学位取得の目処はついたのですが、いよいよ卒業を目前にしても、進路が決まっていませんでした。今思うと不思議ですが、その当時は焦りもなく、「もう一年研究室に残ってポスドクをしながら考えようかな」と、のんびりと構えておりました。そんな折の年度末に、状況を一変させる一本の電話が当時の指導教官に掛かってきました。そして電話を切ると、「明

日、滋賀医大の遠山先生のところに行くから」と告げられました。遠山先生が進めていたプロジェクトで新しくポスドクを募集することになり、進路が決まっていなかった私を推薦してくれるということでした。そんな一本の電話がきっかけで、2008年7月から遠山先生の許でポスドクとして研究を開始することになりました。滋賀医大に来てからは、アルツハイマー病の画像診断薬を開発する研究に従事してきました。滋賀医大には7テスラという非常に高磁場の動物実験用MR装置が設置されています。高磁場MRの利点として高感度な測定が可能となりフッ素原子など様々な核種も測定対象となる点があります。そこでアルツハイマー病画像診断を目的とした高磁場MR装置を利用したフッ素MRIの研究を進めています。また今後は、診断だけでなく、病態の解明や治療法の探索に役立つ研究も進めていく計画です。

研究者としても社会人としても未熟者ではございますが、滋賀医科大学の発展に尽力する所存でおります。皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

経歴

2003年 3月 京都薬科大学 薬学部 卒業
2005年 3月 京都薬科大学 大学院 薬学研究科博士 前期課程修了
2008年 3月 同 博士後期課程修了
2008年 4月 京都薬科大学 21世紀COEプログラム ポスト・ドクター
2008年 7月 科学技術振興機構(JST) 技術員
2009年 4月 同 研究員

2010年 4月 滋賀医科大学 非常勤研究員
2011年 4月 日本学術振興会 特別研究員PD
2012年 4月 滋賀医科大学 分子神経科学研究センター 神経難病診断学分野 助教
2015年 6月 滋賀医科大学 分子神経科学研究センター 神経難病病因学分野 准教授

総合外科学講座



教授 目片 英治

2015年6月16日付けで、滋賀医科大学総合外科学講座の教授に就任致しました。滋賀医科大学を8期生として入学後、在学中はボート部に所属し、瀬田川での早朝練習が日課の日々でした。練習後には1食150円程度の予算で、ご飯、味噌汁、缶詰、時にレタスといったメニューで、空腹を満たしていたことを大変懐かしく思います。同じ釜の飯を食べた仲間、あるいはチームで西医体、全医体、インカレに向け猛練習し、結果が達成される喜びを感じることができました。良き先輩や後輩そして8期生の仲間に恵まれたおかげであったと感謝しております。

そんな学生生活の中で、将来の医師像について考えを巡らせていました。何科の医師を目指すかというより、どんな医師になろうかを考え、「いざという時に頼りになる医師」を自分の目標としました。最終的に外科医の道を選択しました。外科に入局後、小玉正智先生、谷徹先生に御指導いただき、主に消化器外科に携わってきました。外科医として、自分自身の技術を磨いていくことが非常に大切であることを知り、同時に一人でできることの限界も知りました。この度、総合外科学講座を任される機会に恵まれた今、チーム医療の重要性を知り、如何に実践していくかが試されています。診療科間や多職種間の連携、コミュニケーションを十分に行ない、チーム力が最大限発揮されるよう、日々努力しております。総合外科学講座は、大学の講座でありながら、臨床の活動拠点は地域の中核病院で

ある東近江総合医療センター（八日市インター横）にあります。平成22年1月に策定された「滋賀県地域医療再生計画」に基づき、東近江市の国公立3病院（国立病院機構滋賀病院、東近江市立能登川病院、東近江市立蒲生病院）が集約化され誕生した病院です。それだけに市民、行政、さらに医師会からも期待されており、前任の来見良誠教授が進めてこられました地域医療の充実と医師・医学生の教育を継承し、滋賀医科大学地域医療教育研究拠点として総合内科学講座（辻川知之教授）と共に、さらに発展させていきたいと考えています。

東近江総合医療センターは、医大で経験する機会が少ない一般疾患から急性腹症、交通外傷、さらに専門的ながん疾患の外科治療から臓器横断的な抗がん剤治療、がんの緩和医療分野など、幅広い疾患に対応しなければならない地域の中心的な医療機関です。各領域の専門医が多数存在しても、総合的に診療していくことが軽視されがちな現在の医療だからこそ、当院のような診療科の枠をこえた臨床を行うことが重要で、これからの日本の医療において必要なことであると考えています。地域に最新の医療を提供し、併せて若手医師・学生の教育を行っていく為に、よりいっそう大学関係者、同窓会の先生方のご協力ご支援をお願いしたいと考えています。

経歴

1988年 6月	滋賀医科大学 附属病院 医員(研修医) 第一外科	2002年 4月	滋賀医科大学 医学部附属病院 助手 消化器外科
1989年 8月	グアムメモリアルホスピタル 外科臨床研修	2005年 4月	滋賀医科大学 医学部附属病院 講師(学内)
1989年 10月	滋賀医科大学 医学部附属病院 医員(研修医) 第一外科	2007年 4月	滋賀医科大学 医学部附属病院 腫瘍センター 副センター長
1990年 6月	草津中央病院 外科	2008年 10月	滋賀医科大学 医学部附属病院 腫瘍センター長
1996年 4月	恵佑会札幌病院 外科	2011年 5月	滋賀医科大学 医学部附属病院 腫瘍センター 講師
1997年 4月	滋賀医科大学 医学部附属病院 医員 第一外科	2015年 6月	滋賀医科大学 総合外科学講座 教授
1999年 2月	滋賀医科大学 医学部附属病院 助手 第一外科		

産科学婦人科学講座



准教授 木村 文則

2015年7月1日付けで、滋賀医科大学産科学婦人科学講座の准教授を拝命いたしました。

私は、滋賀県生まれの滋賀県育ち、大学も滋賀医科大学医学部（13期）を卒業し、こよなく滋賀県を愛する生粋の滋賀県人です。大学時代は、バドミントン部に所属し、体力と根性をモットーに練習していました。姿からは想像できないかもしれませんが、今も中身はスポ根みたいな人間だと思っています。

1993年に本学卒業の後、産科学婦人科講座に入局、以降、産婦人科医をいたしております。現在、私の専門は生殖医学ですが、それを専門とするまでは、産婦人科全般さまざまなことを学んでまいりました。2年間の滋賀医科大学附属病院での初期研修後、3年目以降の後期研修では、県立病院、市立病院などに赴任し、多くの産科、婦人科の症例を経験させていただきました。この後、滋賀医科大学での研究、市中病院の医長（責任者）を経験させていただき、2002年からは再度、滋賀医科大学で臨床と研究に従事させていただいています。この間、産科婦人科の病棟医長を経験させていただき、その後、生殖医療に従事いたします。また、生殖内分泌学を深めるため3年2月間、University of Massachusetts Amherst, Baystate Medical Centerに留学いたしました。これらの経験が現在の私を支えています。

生殖医療と一言に言っても、妊娠機能を維持するた

めの内視鏡下手術、婦人科内分泌異常の診断と治療、不妊症の診断と治療などがあります。これらはお互い関係しますが、異なる知識が必要です。また、不妊症治療は急速に発展しており、体外受精の世界では一年一昔のようなこともあり日々新しい知識の習得が必要です。このように生殖医療は産科学婦人科学の一部ですが、その診療には膨大な知識と技術の習得が必要となります。

現在、滋賀医科大学附属病院では、採卵件数が年間300件を超え、凍結胚盤胞移植においては移植あたりの妊娠率は50%を超え、診療数、治療成績において国立大学においてトップクラスの成績を誇るようになってきました。また、がん患者さんに対して卵巣組織凍結保存なども近畿地方では最も早く実施しています。これらの背景には、地道な知識の習得と卵巣機能や着床機構の基礎研究を並行して実施していることによると考えています。准教授を拝命した今、さらなる基礎研究と臨床医療に精進したいと考えております。

経歴

1993年 3月 滋賀医科大学 医学部医学科 卒業
 1993年 4月 滋賀医科大学 附属病院 医員(研修医)
 1995年 6月 茨城県立中央病院 医員
 1997年 6月 新宮市立病院(現新宮市医療センター) 医員
 1998年 4月 八尾徳洲会病院 医員
 1999年 1月 滋賀医科大学 附属病院 医員
 1999年 10月 滋賀医科大学 附属病院 助手
 2000年 9月 特定医療法人 社団御上会 野洲病院 医長
 2002年 11月 滋賀医科大学 助手

2007年 9月 University of Massachusetts Amherst postdoctoral fellow
 2008年 9月 University of Massachusetts Amherst Senior research associate
 2010年 11月 滋賀医科大学 附属病院 特任助教
 2011年 4月 国立病院機構滋賀病院(現東近江医療センター) 医長
 2011年 10月 滋賀医科大学 附属病院 女性診療科 講師
 2015年 7月 滋賀医科大学 産科学婦人科学講座 准教授

整形外科科学講座



教授 今井 晋二

2015年8月1日付けで、滋賀医科大学 整形外科科学講座 教授を拝命いたしました。滋賀医科大学と整形外科科学教室の発展に貢献できるよう粉骨砕身、努力する所存ですので、よろしくお願いいたします。

私は平成元年に 滋賀医科大学を卒業し、同年、滋賀医科大学 整形外科科学講座に入局しました。生まれも育ちも滋賀県で、高校は滋賀県立膳所高等学校を卒業しました。高校時代はボート部に所属し、琵琶湖で多くの時間を過ごしました。高校時代のみならず、滋賀医科大学に入学してからもボート部に所属し、高校時代と同様に琵琶湖で多くの時間を過ごしました。

その後、大学院に進学し、「骨・関節器官における神経解剖」のテーマで第一解剖学講座の故前田敏博教授に指導をうけました。当時の第一解剖学教室では日々の研究が終わると前田教授のお宅で盃を片手に研究談義することが多く、諸先輩方にこの場で懇意にさせていただきました。

大学院終了後の平成8年6月から平成10年3月までヘルシンキ大学整形外科に留学し「人工股関節のゆるみ」について研究しました。帰国後の平成10年11月からは、本学初の日本学術振興会・特別研究員(PD)に就任し、平成12年7月から平成13年6月までアムステルダム自由大学歯学部において「骨の運動刺激と抗加齢作用」について研究しました。

平成13年7月に帰国し、第3代松末吉隆教授の主宰されている滋賀医大整形外科科学講座に助手として復

帰しました。当時は、大学附属病院の再開発事業がまさに始まろうとしていた時期で、平成16年11月にリハビリテーション部助教授を拝命し、懸案とされていた回復期リハビリテーション病棟(46床)の設置準備に尽力しました。

この間、一貫して26年間、整形外科の研究・臨床に携わり、これまでに22名の博士号を当時の主任教授の元に指導しました。臨床では、上肢外科、特に肩・肘の外科を専門にしており、平成26年には滋賀県内の鏡視下肩関節手術の72.6%を執刀しました。ここ数年は滋賀県全域に加えて他府県からもご紹介を頂き、症例数は直線的に増加しております。

学部の学生さんには、親しみやすい整形外科をモットーに教育を進めたいと思っております。系統講義以外に臨床実習では、毎週ミニレクチャーを行って、学生の皆さんと膝を突き合わせた指導・教育を心がけています。学生の皆さんには、色々な場面で積極的に声をかけていきたいと思っています。

今後ともよろしくお願いいたします。

経歴

1989年 6月 滋賀医科大学 医学部附属病院 整形外科 研修医
 1990年 4月 滋賀医科大学大学院 医学研究科博士課程 入学
 1996年 1月 滋賀医科大学 医学部 解剖学第一講座 助手
 1996年 6月 ヘルシンキ大学医学部 整形外科にて留学 研究
 1998年 11月 日本学術振興会・特別研究員(PD)
 2000年 7月 アムステルダム自由大学 歯学部にて留学 研究
 2001年 7月 滋賀医科大学 医学部 整形外科科学講座 助手

2004年 11月 滋賀医科大学 医学部附属病院 リハビリテーション部 助教授
 2012年 5月 滋賀医科大学 医学部 整形外科科学講座 准教授
 2015年 8月 滋賀医科大学 医学部 整形外科科学講座 教授

生命科学講座(化学)



教授 古庄 義雄

2015年9月1日付けで、滋賀医科大学生命科学講座(化学)教授に着任いたしました。大学生にとって大変重要な初年次教育、そして医学にとって基礎となる化学を教えるという重責に身が引き締まる思いです。

私は東京大学を卒業して以来、工学系の場所を渡り歩きながら仕事をしてまいりましたが、今回は医学部、そして、一般教養の担当ということで、とても新鮮な気持ちで臨んでいます。これまでは主として、超分子化学や高分子合成を基盤とする工学的材料の開発に携わってきました。とくに、ナノスケールで精密に有機分子・高分子を配列させたり、集積させたりする技術の開発に重点をおいてきました。また、生体系でもしばしば問題となる分子のキラリティの制御に関しても力を入れてきました。有機合成や高分子の構造制御の技術が飛躍的な発展を遂げていった時代に、最先端の研究に携わることができたのは、自分にとって本当に幸運なことであったと思います。こちらでは、心機一転、医学材料の開発に挑戦していきたいと考えています。工学的材料と医学的材料は別物であるとも言えますが、基礎となるものづくりの技術は全く共通のものになります。これまでの経験から得られた知識と技術を活かして、医学系の先生方のお力添えをいただきながら、挑戦的な医学のテーマにチャレンジして行ければと考えております。

教育面では、これまでに様々な場所で大学生の教育

に携わってきた経験から、初年次教育こそ最重要課題であると考えています。「高大接続」および「専門教育へのスムーズな移行」を念頭において、学生が本学に対するアイデンティティを獲得して自分の将来像を描きながら学習へ取り組んでいくことができるような工夫をしていくつもりです。とくに、私が学生に望むことは、まずは自分の大学を好きになって欲しいということです。そのためにもまず、自分が本学のことをしっかりと学ばねばと考えています。

出身は熊本で、高校卒業以来、東京、大阪、名古屋、福岡、フランスと色々な場所で生活してまいりました。関西は大阪府立大学以来2度目ですが、大変住みやすいところで、とくに滋賀県は歴史と文化に溢れ、環境も素晴らしく、仕事とともに生活もエンジョイしたいと思っています。

着任したばかりで、まだ右も左も分からない状況がありますが、これから先生方に色々ご教示いただきながら、また、お力添えをいただきながら、教育、研究、そして大学運営業務に取り組み、微力ながら滋賀医科大学の発展に尽くしていきたいと思っています。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

経歴

1991年 3月 東京大学 農学部 卒業
 1993年 3月 東京大学大学院 工学系研究科修士課程 修了
 1995年 8月 東京大学大学院 工学系研究科博士課程 中退
 1995年 9月 大阪府立大学 工学部 助手
 1999年 4月 フランス、ストラスブール大学 留学(2000年3月まで)
 2000年 4月 大阪府立大学大学院 工学研究科応用化学分野 助手

2003年 4月 科学技術振興事業団ERATO グループリーダー
 2008年 4月 名古屋大学大学院 工学研究科 准教授
 2011年 4月 近畿大学 分子工学研究所 准教授
 2015年 9月 滋賀医科大学 医学部生命科学講座(化学) 教授

著作権講座 (その2) ～「引用」の効果～



レポートは、事前に図書などを使って集めた情報を材料に読み手に自分の主張が伝わるように書く必要があります。その際レポートに必要ななら、他者が書いた図書などから必要な部分を抜き出して加えることがあります。

ここで求められるのが正しい「引用」の仕方です。「引用」が正しくできていない、他者の意見を無断であたかも自分の意見であるように記述することは「ひようせつ剽窃」として不正行為となります。

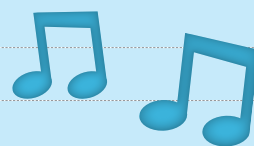
Q. 引用するのはなぜ？

「引用」とは別の文献などで使われている意見やデータを自分の文章中で紹介することを言います。「引用」はレポートを書く時だけでなく、論文や自身のブログなどで他者の意見を利用する際に必ず求められるマナーのようなものです。「引用」を正しく行うことで次のような利点があります。



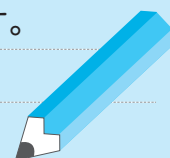
A.1 独自性を主張することができる

レポートを書くにあたって、核となる自分の意見のオリジナリティを主張することは大切です。すでに公表されている他者の意見と比較することで、自分の意見の独自性や新規性を分かり易く示すことができます。



A.2 自分の意見の根拠とすることができる

いかに自分の意見に独創性があったとしても、その裏付けがなくては読んでいる人を納得させられません。自分の主張を援護・裏付けするような客観的意見として他者の意見を紹介することで、自分の主張の土台を強めることができます。



A.3 自分の意見を補強することができる

単に自分の意見を主張するだけではそのレポートは感想文になってしまいます。主張の根拠とは別に、自分とは異なる意見も取り入れ、それを踏まえた展開にすることで読んでいる人により説得力を持たせて自分の主張を伝えることができます。

引用文献の書き方

「引用」する際には、引用部分を「」（鍵かっこ）でくくるなどして自分の意見ではないということを明確にします。そして引用した情報源についての情報(= 出典元)を記す必要があります。引用文献の書き方には様々な方法、書式があります。

ここでは図書、雑誌、Web サイトについてどのように書くのか簡易的な例で紹介합니다。

例えば…

図 書

著者名 . 書名 . 出版地 , 出版者 , 出版年 , ページ数 .

(例) 井下千以子 . 思考を鍛えるレポート・論文作成法 . 東京 , 慶應義塾大学出版会 , 2013 , p42 .

著者名

書 名

出版地

出版者

出版年

ページ数

雑 誌

著者名 . 論文タイトル . 雑誌名 . 出版年 , 巻号 , ページ数 .

(例) 山中伸弥 . 人工多能性幹細胞の樹立 . 日本医師会雑誌 . 2011 , 139 (10) , p.2126-2130 .

著者名

論文タイトル

雑誌名

出版年

巻 号

ページ数

Web サイト

著者名 . “Web ページの題名” . URL , 参照日 .

(例) 滋賀医科大学附属図書館 . “マイライブラリサービスについて” .

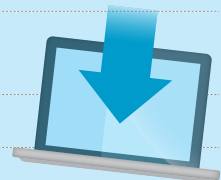
著者名

Web ページの題名

<http://www.shiga-med.ac.jp/library/support/webill.html> , (参照 2015-11-1) .

URL

参照日



Point - ポイント -

引用した文献の情報があれば…

読み手にとっては、書き手の主張の根拠となっているそれらの情報を確認しやすい。
書き手にとっては、きちんと調査したこと、「剽窃」ではないことをアピールできる。

附属図書館情報サービス係

TEL : 077-548-2080

E-mail : hqjouser@belle.shiga-med.ac.jp

2015年10月1日、附属図書館2階の
アクティブラーニング室にて、
「大人のビブリオバトル」を開催しました。

大人の

2015.10.1 Thu ビブリオバトル

持ち時間5分でおすすめの本を紹介。
その後3分程度の質疑応答があります。



発表者（バトラー）を教職員に限定した「大人のビブリオバトル」、
当日は5名のバトラーを含め、29名の方にご参加いただきました。
バトラーのみなさんの熱い発表と活発な質疑応答が繰り広げられ、
和やかかつ刺激的な、とても盛り上がった会となりました。
参加して下さったみなさん、どうもありがとうございました！



バトラーのみなさんと
スペシャルゲストの堀池先生



チャンプ本の紹介者に金メダル授与！

チャンプ本
（一番読みたくなった本）

「英語語源辞典」
発表者：中谷仁さん

今回紹介された本とバトラーは以下の通りです。（発表順）

- 『私の嫌いな10の言葉』（中島義道著）
田村峻一さん（図書課）
- 『英語語源辞典』（寺澤芳雄編集主幹）
中谷仁さん（分子神経科学研究センター MR 医学研究分野）
- 『2001年宇宙の旅』（アーサー・C. クラーク著）
小山由紀子さん（実験実習センター）
- 『デザイン、現場の作法。』（伊達千代著）
小島秀人さん（生化学・分子生物学講座（再生・修復医学））
- 『国民のコトバ』（高橋源一郎著）
助川晃自さん（国際交流支援室 / 文学・フランス語）

全て図書館に入りましたので、ぜひ読んでみてくださいね！

ビブリオバトルとは？

- 発表者（バトラー）が、読んで面白いと思った本を持って集まる
- 順番に一人5分間で本を紹介する
- それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う
- 全ての発表が終了した後どの本が一番読みたくなったか参加者全員で投票。最多票を集めたものを『チャンプ本』とする

図書館では今後もビブリオバトルを開催する予定です。
ぜひご参加ください！

Library Book Bazaarを 開催しました!!

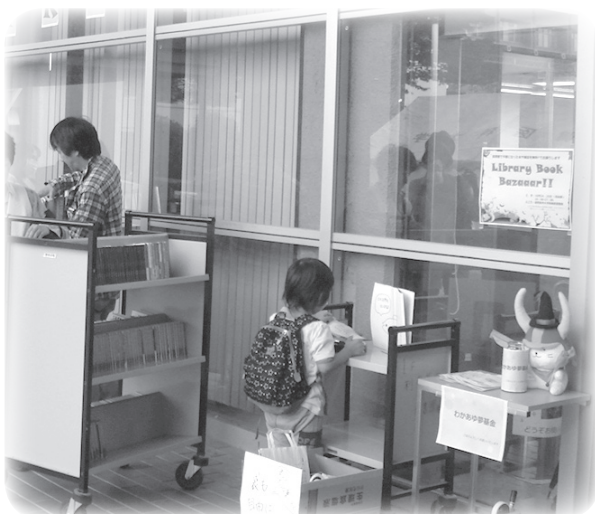


図書館で不要になった図書や雑誌を、若鮎祭来場者の皆さまに無料でお譲りする Library Book Bazaar を、図書館前のスペースにて開催いたしました。

今年は土日両日ともに天候に恵まれたこともあり、たくさんの方々にお立ち寄りいただけました！



皆さま熱心にそれぞれの掘り出し物を探されています。



学園祭内の企画ということで、お子様連れの方も多くいらっしゃいました。(むずかしい本ばかりでごめんなさい！)

出品した 2,282 冊のうち、2 日間で
760 冊の資料がお引き取りいただけました！



また同時に、本学の「わかあゆ夢基金」へ
ご寄付をお願いいたしましたところ
総額 14,398 円の寄付をいただきました。

たくさんのご協力をいただき、誠にありがとうございました。

研究医養成コース活動紹介 社会医学講座(法医学部門)編

研究医養成コースでは、基礎系研究医の養成のため、研究サークル等、学生の主体的な探究活動をサポートしながら、課外活動としての研究の場を提供しています。

今号では、研究医養成コースに登録している奥長隼さんと社会医学講座(法医学部門)の一杉正仁教授にどのような活動をしているのか紹介していただきます。



医学科第4学年 奥長 隼

所属研究室 社会医学講座(法医学部門)

指導教員 一杉 正仁 教授

所属学会 日本法医学会、日本医学写真学会

研究テーマ 小脳顆粒細胞の組織学的検討と死因の関係



ドイツでの研修時

Q. 研究医養成コースを履修しようと考えたきっかけはなんですか？

A. きっかけは先生に研究医養成コースへの登録を勧めていただいたことでした。学会への参加に関わる費用のサポートだけでなく、学内や学外の研究医を志す医学生との交流の場を設けていただけるということも登録する決め手になりました。私が入学した年度から研究医養成コースが開始されたのですが、タイミング良くその恩恵を受けることができ、とても嬉しく思ったことを今でも覚えています。

Q. 学会発表の経験があれば、その時の達成感や苦労話など教えてください。

A. 今年の夏に機会をいただき、学会発表を経験させていただきました。ただ単に研究内容をまとめるのではなく、学会の趣旨や、その学会に来られる方々の専門分野を意識しながらまとめる必要があり、その点が特に難しく苦労しました。しかし、このような機会がなければ研究内容が他の人の目に触れる機会はなく、評価をしてもらうこともできないので、発表を終え、質問をいただけた時にはとても達成感を感じました。また、大勢の前で分かりやすく発表するための訓練が必要であると実感しました。

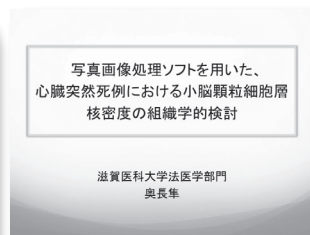
Q. 登録コースに登録してよかったと思うことは？

A. 学会への参加など、費用のサポートを受けられる上に、学会に参加することで最先端の知識を得ることがで

きることです。また、学会内での議論を通して専門家の視点を知ることができることも大変勉強になりました。

Q. 登録を考えている後輩へ一言お願いします。

A. この研究医養成コースにはメリットしかないのではないかと考えています。様々なサポートを受けることができるだけでなく、これから医学を学んでいく上での視野を大きく広げるきっかけにもなります。私は、法医解剖に参加して、解剖学を中心とした基礎医学から医学的手技を含めた臨床医学、予防医学などを幅広く学べました。そして、先生方と交流を深めることができました。いきなり研究を行うには抵抗があると言う人のために、研究への興味を育てるための入門研究医コースもありますので、ぜひ研究医養成コースの仕組みを活用してもらいたいと思います。



日本医学写真学会での発表の様子

指導教授と参加講座の紹介

社会医学講座(法医学部門)教授 一杉 正仁

研究分野 外因死の予防医学、突然死の病態生理、傷害バイオメカニクス

主な担当科目 法医学、保健医療と社会



(1)ご自身と法医学部門の紹介

法医学では、突然死、事故や事件による死亡に対して、死体検案や法医解剖によって正確な死因を究明し、死に至るメカニズムを解明します。当講座は滋賀県の法医解剖を担当する唯一の機関であり、年間約100体の解剖を行っています。また、死者だけでなく事故や犯罪の被害者を診察して、受傷機転や凶器を明らかにしています。特に近年では、虐待を受けた小児や老人の診察、鑑定が増えています。臨床医学と同様に、正確な診断を行うことは生命線です。したがって、診断精度の向上を目的にした研究、不慮の事故や突然死を減らすべく予防安全に向けた研究が主となります。なかでも交通外傷予防の研究では、国内の大学や自動車メーカーなどと共同研究を行っています。私は県内の死因究明協議会の会長を務めるとともに、県医師会、県警察とともに県内の治安維持、安全確保に尽力しています。

(2)研究室の日々の活動

- (1) 法医解剖
レントゲン撮影、全身(頭腔、胸腔、腹腔及び損傷部位)解剖、全ての臓器の病理組織検査、体液を用いた薬毒物検査や臨床生化学検査を行います。
- (2) 家族への説明とグリーフ・ケア
解剖結果を家族に説明し、家族の疑問に応えます。また、遺伝性疾患や不適切な環境での死では、直ちに予防対策を講じることで、生存している方のさらなる死を予防できます。
- (3) 県内の予防安全活動
児童相談所とともに被虐待児を救う対策に取り組んでいます。また、県警とともに、全交通死亡事故例を分析し、事故死者ゼロにむけた対策を検討しています。
- (4) 研究
工学的手法などによる傷害バイオメカニクス、免疫組織化学を用いた心臓突然死の病態解析、疫学

的手法による外因死の予防医学など、臨床医学と連携した幅広い研究に従事しています。

(3)研究医養成コースの学生の研究紹介

現在登録している学生の課題は以下のとおりです。いずれも内外の学会で発表を行っています。

- (1) 小脳顆粒細胞の組織学的検討と死因との関係についての研究(4年奥長君)
- (2) 加害車両の種別による歩行者交通事故損傷の解析(6年小崎君)
- (3) 運転中の疾病発症者の救命方法と先進事故通報システムの応用(4年瀬越君)
- (4) 子どもの死亡低減、preventable deathに向けた研究(4年首藤君)
- (5) 脳卒中患者の神経生理学的検査結果と自動車運転能力についての解析(3年井上君)
- (6) 異状死剖検例による前立腺ラテント癌および危険因子の解明(4年竹田君)

(4)学生へのメッセージ

当講座は遺族や被害者、そして社会と密接に関係しています。したがって、豊かな人間性を持ち、コミュニケーションが円滑に取れる方をお待ちしています(もっとも、そうでない方が入学されては困るのですが)。さらに、研究医コースであっても、まずは正しい診断を下せることが医師を目指すうえで欠かせません。したがって、法医解剖に参加して、解剖学や臨床医学の基礎を学び、医師として必要な手技を学んで頂くことを原則とします。当講座の守備範囲は幅広いので、興味を持った内容に向き合い、問題解決を図って下さい。国内外の多くの専門的機関や大学との共同研究がありますので、出向いて研究して頂くことも大歓迎です。研究のための研究ではなく、わが国のセーフティプロモーションにつながる研究に従事する方をお待ちしています。

海外自主研修



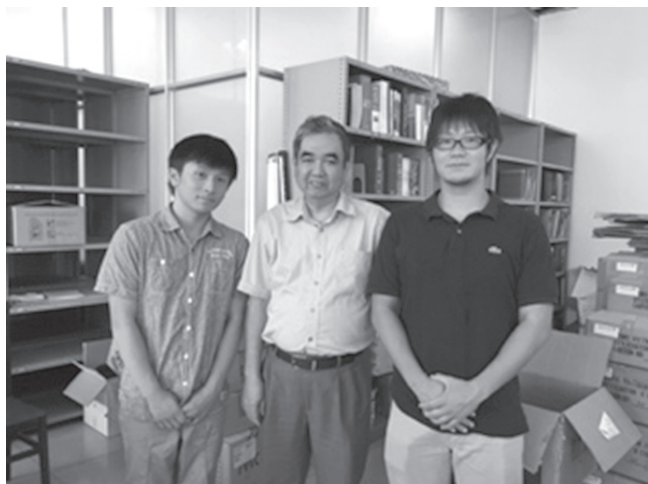
チョーライ病院での自主研修報告

医学科第4学年
岡本 裕哉



2015年8月20日から9月4日までベトナムのホーチミン市に位置する、チョーライ病院で海外自主研修をさせていただきましたため報告させていただきます。ベトナムは東南アジアのインドシナ半島東部に位置する社会主義共和制国家です。日本と比べて温度と湿度は高く、毎日のように夕方にスコールは降るものの、夜は涼しく過ごしやすい環境でした。しかし整備されていない歩道、交通ルールが整っておらず縦横無尽に暴走するバイク、大量の排気ガスと道に散らかるゴミから立ち込める悪臭にはまだまだ発展途上であることを思わせるところが多岐にわたって見られました。

今回お世話になったチョーライ病院でも、訪問して初めに受けた印象は想像を絶するものでした。病院の敷地とベッドの数が足りず廊下で大量に寝そべる患者、不衛生な環境で行われている治療、不潔なトイレ



など、およそ日本では理解しがたい医療状況を目の当たりにし、初めのほうは驚きを隠せなかったです。そんななかで僕たちのお世話をしてくださり、支えてくださった Bich 先生と Hien さんには感謝してもしきれません。また滋賀医大で研究をし、学位を取られた先生方や看護師の方々に数多くお会いすることができ、大変良い機会となりました。

チョーライ病院の実習は、診療科を自由に選択することができ、僕は emergency department, Gastro intestinal department, Hepato Biliary pancreatic surgery, tropical disease、の四つの科を二日間ずつ回りました。

まず emergency department では、先ほども述べたように不衛生な環境が目立ちました。救急に運ばれてくる原因で最も多いのは交通事故だと臨床の先生がおっしゃっていました。道路整備や厳格な交通ルールの設定がないことが町に一步踏み出すだけでわかるので、改善の余地があるのではないかと思いました。それは院内にも言えることで、車いすや体の不自由な人々のためのバリアフリーをもっと行うべきだと思いました。また先生方は大変忙しそうで、まだ医師になったばかりの研修生も進んで治療に取り組んでおり、人不足であることを肌で実感しました。

Gastro intestinal department と Hepato Biliary

pancreatic surgery では手術室に実際に入って、CBD に詰まった胆石を取り除く手術、大腸がんを摘出してから直腸と大腸をつなげる手術、膵臓の嚢腫を摘出する手術や、胃がん肝がんの手術などを観察することができました。手術室は清潔が徹底されており、手術前に手は一方向に外側に洗っていかねばならないことや、靴や服の上に何重も重ね着しなければならないことなど大変勉強になりました。この科ではできれば日本でポリクリを回った後に見学したいと思いました。また手術設備も自分で想像していたより高度で、emergency department を見学した後ということもあってか、充実した環境だと感じました。

Tropical disease では気候や環境の違いから日本では生息していない蛇にかまれた時の治療法や蛇の種類によって症状が異なることなど日本ではあまり診ることのできない疾患を観察することができ、大変有意義なものとなりました。

二週間お世話になったベトナム料理も日本人の口によく合い、二週間食べても飽きることのない料理の種類がありました。中心街には日本人街や中華街もあり、食文化は大変充実していました。またベトナムの物価は日本の半分かくらいであり、たらふく食べても 500 円ほどであったため財布に優しかったです。ベトナム人は大変親日で、多くの方々に親切にしてもらったり、ご飯に連れて行ってもらったり、一緒に遊びに行ったりしてもらい大変充実した自主研修となりました。

この自主研修を振り返ると、足かせとなったのは英語能力のなさでした。もともと英語が苦手な特になんの対策もしてこなかったため、現地ではやはり相当困りました。そもそもベトナムは英語圏ではなく、ベトナム語を公用語として話しています。街を歩いても英語をしっかりと話せる人はおらず片言であり、お互いに不安定であるためコミュニケーションをとることが難しかったです。病院内では英語を話せる先生方は一定数おられましたが、ベトナム訛りになっているのと早口なので、自分のリスニング能力では会話を成立させることが難しかったです。そういった点ではやはりしっかり英語能力をつけて自主研修に臨むべきであると思います。来年またベトナムに行かれる人がいるならば参考にさせていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回このような貴重な学びの機会を設けてくださり、また支えてくださった相浦先生、チョーライ病院研修担当の Bich 先生、看護師の Hien さん、各科でお世話になった先生方、患者の皆様、並びに和仁会の皆様方、ご協力ありがとうございました。



ジョンズ・ホプキンス大学で 過ごした夏

医学科第4学年
橋場 奈月



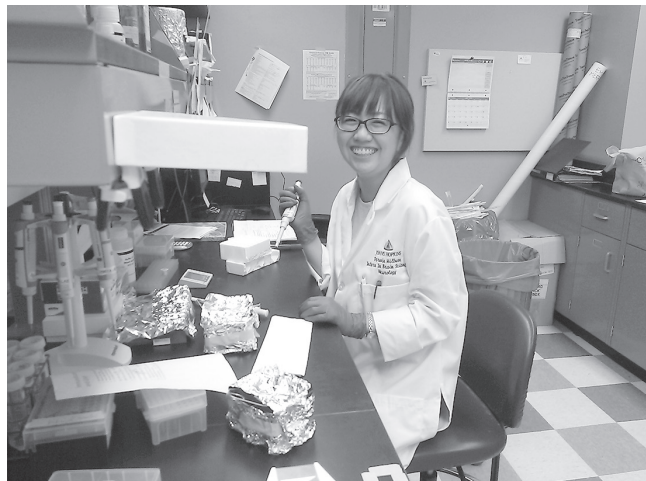
西医体が終わった次の日に日本をたち、8月17日～9月18日までの5週間、米国ボルチモアにある Johns Hopkins University の The Atsushi Kamiya Lab で研修を行いました。滋賀医大 OB であり、精神科医の神谷篤先生が率いる研究室で、うつ病をはじめとする精神疾患についての基礎医学研究が行われていました。研修では、日々の研究補助、週一回のラボミーティングとグループミーティングへの参加、さらに、臨床医学研究の見学、気分障害の teaching round への参加、強迫性障害グループの教授との面談をさせていただきました。

研究補助は、ポスドクの方に付き、実験手技や理論を教えてもらうかたちで行いました。私が付かせていただいたポスドクの方は、抗うつ作用を持つ漢方薬の分子レベルでの作用機序を明らかにし創薬につなげる研究をしており、マウスモデルの作成、行動実験、分子生物学的解析に携わらせていただきました。文献検索を行い研究の方向性を考えるディスカッション、投稿準備中の論文に載せるグラフの作成や画像処理も経験させていただきました。実際に論文がどのように作り上げられていくのかを肌で感じることができました。

Teaching round や教授との面談は、米国の基礎医学研究のみでなく臨床医学に触れることができた貴重な機会でした。Teaching round は、20名ほどの研修医、



研究室のメンバーと



研究室での様子

看護師、学生を前に、指導医が患者さんを問診し、その後解説を加えるというものでした。大勢で見ていることもあり、その後の参加者間の議論が活発であったことが魅力的だと感じました。

Kamiya Lab が属しているグループは、Johns Hopkins University の研究グループの中でも大きな方であり、所属している研究者の出身国は多種多様でした。世界中の人が探せるのではないかと思うほどであり、世界中から研究者が集まる米国ならではだと感じました。色々なアクセントの英語に触れながら、それぞれの国の文化や言葉を教えてもらうこともでき、とても興味深く勉強にもなりました。また、Johns Hopkins University の研究施設は病院内にあり、全体として巨大な施設になっていました。動物舎に行くにも、実験装置を使いに行くにも、迷路のような施設内を通り抜けていかなければなりませんでした。最後の最後まで迷っていましたが、この移動時間はアメリカ社会を知る機会でもありました。すれ違う医師、研究者、コメディカル、事務スタッフ、清掃員の方々を見ながら、米国の多様性と格差社会を感じ、考えさせられました。

研修を開始した当初は研究室が忙しい時期であり、時差ボケと慣れない生活の中、日々研究室で朝から晩まで過ごす生活をしていました。研修期間の半分が過ぎた頃には、研究室が少し落ち着き、私自身も研究室生活に慣れたこともあり、新たにできた友人と色々な所に出かけ、米国らしいことに挑戦する時間ができました。平日の研修終了後や休日に、ジムに通ったり、シティマラソンに出場したり、パーティやスポーツ観戦、観光にも行ったりと、毎日が充実していました。研究室でも多くの学び

を得ましたが、研究室以外でも多くを経験し、研究室では学べないことを学び、視野を広げることができました。どちらで過ごした時間もかけがえのない時間であったと感じています。

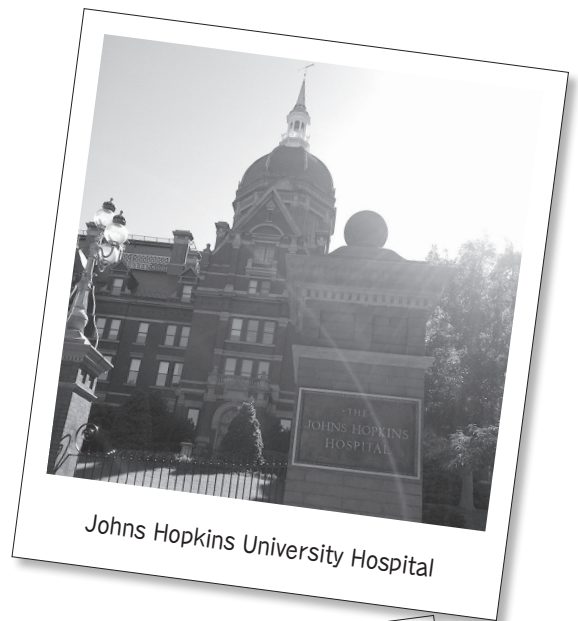
不十分ではありましたが、そのほぼすべてを英語でこなすことができたことは、自分自身にとって大きな自信になりました。一方、理解が困難であったこともあり、自分の至らなさが身に染みる経験でもありました。悔しさと悲しみを感じながら、次の機会をつかめるときまでには、必ずや成長してみせるという大きなモチベーションになっています。

今回の自主研修では、多くの新たな学びと経験、新たな出会いに恵まれ、私自身の人生において大きな意味を持つ時間を過ごすことができました。海外での研究生活を知ると共に、それぞれ異なる先生方のキャリアパスをお聞きすることもでき、自分の将来の進路について考える機会にもなりました。苦労もありましたが、心から今回の研修に行くことができ、幸せだったと感じています。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった精神科講座の山田教授、事前研修を指導して下さった再生・修復医学講座の小島教授、寺島准教授、榎先生、Johns Hopkins Universityで私を受け入れて下さった神谷准教授、神谷ラボで研究している齋藤先生やZhu先生、お世話になったラボテク・ポスドクの方々、奨学金をくださった滋賀医学国際協会の皆様、学生課の皆様、以上の方々をはじめとする多くの方々、そしていつも私を支えてくれる家族と友人に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。



マラソンに挑戦！



Johns Hopkins University Hospital



滋賀医大精神科の吉村先生と



受け入れて下さった神谷先生と

グアテマラでの 学外臨床実習を終えて

医学科第6学年
大橋 瑞紀



診療所の医療スタッフ・医学生とともに

6年生前期の学外臨床実習の期間を利用して、中米のグアテマラ共和国にあるフランシスコ・マロキン大学医学部附属の診療所にて、2ヶ月間臨床実習を行いました。

グアテマラは医療機関へのアクセスが悪い地域が多いため、どの医学生も、最終学年では4～6ヶ月間地方の診療所で実習を行うことになっています。フランシスコ・マロキン大学も、首都から車で2時間程の地域に診療所を開設しており、私はこの診療所で2ヶ月間、現地の医学生と共に実習を行いました。

グアテマラの医学教育は7年制で、4～6年生は毎日学外の一般病院での臨床実習を行います。グアテマラは医療従事者が不足していることもあり、学生に任される業務の範囲が広く、中心静脈カテーテル挿入や虫垂炎の手術も、学生の間で経験できるそうです。現場の戦力として4日に1度は当直があり、連続36時間立ち働き通しで寝られないと聞き、あまりのハードさに驚きました。私が実習をした診療所には現役医師もいましたが、最終学年の医学生達は一般病院でのハードな実習を終えているため、診察や診断、治療、薬の処方、救急搬送を自らの判断で行っていました。重症患者さんは首都にある病院まで搬送されるのですが、「すぐ搬送しないと危険だ」と言って搬送した患者さんが病院に着くのは2時間後であることなど、心配事は絶えませんでした。このような環境で、医学生が地域住民に与える安心感は大きいものだと感じました。

日本とグアテマラで医療事情や教育システムの違いはあるものの、現地の医学生は学生とは思えないほど



全て手書きのカルテ



助産師さんへの健康教室

の知識や技術、使命感をもって診療にあたっていました。自分が日本で学んできたこととの差に苦労しましたが、採血、末梢静脈路確保、裂傷の縫合等、日本で学んできたあらゆる手技を実際の患者さんに対してさせていただき、また、目標としていたスペイン語での診察もできるようになりました。中でも、分娩介助したのは印象深い経験でした。いずれの手技も、いつかは日本で経験できると思いますが、これら初めての経験をグアテマラで得られたことは、これから医師として歩いていくうえで心に残り続ける、非常に貴重な体験になりました。

診療所での実習の他に、週に1度は診療所からさらに30分程離れた地域で出張診療を無料で行き、集まった人に対して健康教育、疫学調査を行いました。この地域では、子供が多ければ多いほど良い母親だという考え方があり、5人以上子供がいることや、15歳で妊娠していることは珍しくありませんでした。さらに経済的理由も加わり、妊娠回数を重ねるほど検診に来なくなったり、子供達に十分な栄養を与えられなかったり、女の子の教育の機会が失われたりと、あらゆる悪影響に繋がっているという現実もあります。医学生も診察の度に、これらの問題点について母親や父親、



診察室の様子



いつかまた協力しあえる日が来ますように

地元の助産師に説明をしていました。このような貧困地域では、患者さんに検査や再診が必要だと説明しても、お金がないと二度と診療所へは来ず、栄養失調や下痢で亡くなる子供や出産時に亡くなる女性もいます。一方で、都市部では高い受診料を支払えば良質な医療を受けることができ、高血圧や糖尿病といった生活習慣病も問題になっています。グアテマラは貧富の差ゆえに個々人の生活環境が大きく異なるため、各患者さんに合わせた診療を行う能力が、グアテマラの医師には特に重要であることを実感しました。

診療所での実習内容以外に印象的だったことは、現地の医学生達は母国語のスペイン語よりも英語の方が良質な情報が得られると考えており、日頃から英語で医学書を読んでいるため、流暢な英語で専門用語を使いながら診察や処置の説明をしてくれたことです。スペイン語と英語が堪能なこと、また、専門分野によっては自国での研修プログラムが存在しないこともあり、日本の医学生が「卒後どこの病院で研修するか」と話すのと同じ感覚で、「卒後どこの国で働くか」とお互いに話していました。人材不足に悩むグアテマラの悩みの種かとは思いますが、国外で自分の可能性を

広げるハードルが低いことを羨ましく感じました。

2ヶ月間のグアテマラでの臨床実習を通して得られた経験は、どれもかけがえのないものですが、中でも、現地の医療スタッフや医学生との出会いは私にとって大きな収穫でした。日本から遠く離れた国に、自分と同じように人々の健康や幸せを願っている人がいること、そのために今この瞬間も懸命に働いている人がいることを知ることができ、とても心強く、嬉しく感じました。そんな使命感あふれる人達と、友人と呼び合える関係になれたことは、一生の宝物です。今回はただの学生として、現地の医療スタッフや医学生から与えてもらうものばかりでしたが、いつか医師として、彼らと協力しながらグアテマラの医療に貢献できる日が来ればと今から楽しみです。

最後に、今回の学外臨床実習に際して、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」という奨学制度を利用しました。年2回募集があり、2ヶ月以上2年未満の留学なら、専門分野を問わず全国の学生が、自分で計画したオリジナルの留学計画を応募することができます。留学資金援助が得られるだけでなく、事前研修もあり、自分の価値観や留学計画を見直し、良い状態で留学に臨むことができました。また、羨ましいくらいのアイデア、行動力をもった個性あふれる学生との出会いも非常に魅力的で、今でも交流が続いているのは心強いです。本奨学制度は、海外での自主研修や学外臨床実習を後押ししてくれる、おすすめの制度です。特に学生の留学に関しては、やる気が全てということではなく、海外での実習を認めてくれる大学の制度や、留学を後押ししてくれる奨学制度も必要だと思います。滋賀医大では幸運にも海外での実習が単位として認められるため、これらの制度を利用しながら、より沢山の学生が海外で経験を積む機会を得られればと思います。



初めてとりあげさせてもらった赤ちゃん



寮での生活



週末は近くの遺跡に観光

シンガポール留学記

医学科第6学年
細尾 真奈美



「あんだ、海外実習するなら英米なんかより、いま発展してる国がおもしろいで！シンガポールや！」

すべては母のこの一言がきっかけでした。2015年5月11日から6月19日まで、私はシンガポール国立大学にて、6週間の学外臨床実習に参加しました。



シンガポールのランドマーク、
マーライオンとマリーナベイサンズ。

シンガポールは東京23区ほどの国土に、中華系、マレー系、インド系の多様な民族が同居している国です。公用語は英語、民族ごとの言語とは別に、幼少期から英語で教育を行っています。高い教育水準で知られ、私の行ったシンガポール国立大学は、世界大学ランキング・アジア1位！ そんな大学で果たしてやっていけるのか……。不安を覚えながらチャンギ国際空港に降り立ったのは5月のこと。シンガポール留学、はじまり、はじまり。

●多民族の医療現場

実習初日。チャンギ総合病院救急科。指定された場所へ行くと、白衣を羽織ったインド系の綺麗な女の子が先に待っていました。名前は、ハシニ。イギリスの医大に通うインド系シンガポール人で、実習のために自国に帰ってきたのだそう。救急外来を見渡せば、中華系、インド系、マレー系、医療スタッフから患者さんまで多様な民族に溢れています。私の先生は、中華系のアン先生。救急科ベテランドクターの彼の下での実習が始まりました。



シンガポール国立大学の医学生、アビーとシャイナ。
とても賢く頼りになる2人です。

●医師の働き方

救急科の医師のシフトは8-16時、16-23時、23-翌日8時の三交代。時間になれば引き継いで「退散じゃ〜」と小躍りしながら出て行きます。夜間シフトの翌日は必ず休み（シフト表にはSleeping Dutyとあり、寝て休むのも義務のうち）、4日おきに休みがあって、生活リズムを整えやすいようなシフト構成になっています。私もアン先生のシフトに合わせて、救急外来での実習を行うことになりました。

●刺青 OK の衝撃

なんと。シンガポールでは、医師・看護師の「タトゥー & ピアス OK」です。看護師さんの耳には、立派なピアスと一緒に、刺青の蟻が這っていました。外来見学で付いた医師の手の甲には、なぜか漢字で「体力」のタトゥー。服を脱いで背中 of 立派なドラゴンを見せてくれた医学生も……。いろいろな民族の方が住むので、服装や装飾品には特に寛容です。

●医学生の臨床実習

自ら考え、自ら動く。とにかく医学生が積極的です。医学生は、救急外来に患者さんが運ばれてくると、自ら問診と身体所見を取り、採血をして、必要があれば尿道カテーテルまで入れてしまいます。それも、看護師さんと雑談しながら、あっという間に。そこに指導の先生がやってくると「〇〇歳男性、主訴は〇〇です。身体所見は〜」などと30秒ほどで症例をプレゼン。先生も学生のプレゼンを聞いてその場でフィードバックを与えます。

先に紹介したハシニの他、中華系の仲良し女子2人組、アビーとシャイナと仲良くなったのですが、どの学生も「自分の頭で考えて行動する」姿勢が徹底していました。

●患者さん

患者さんは中華系のお年寄りが多く、お年寄りは英語が苦手なため中国語で話します。さっきまで一緒に英語で話していた同級生が、さっと中国語に切り替えて中華系のおばあちゃんの間診を取り始めます。マレー系やインド系のお年寄りも母語で話すので、医師もそれぞれの言語での問診をマスターしていることが多いようです。

患者さんは一般の方だけではなく、近くに刑務所があるので、刑務所の受刑者も同じ救急外来にやって来ます。もちろん自由に行動できないので、左右には警察官、両手両足を手錠で繋がれ、たとえ意識が朦朧としていても、常にベッドのどこかに手錠で繋がれています。採血の際に手錠が邪魔になると「すみません、これ別の場所につけてもらえませんか」と警察官にお願いするのです。

●教育熱心な現場

看護師さん「はい、導尿やって」
私「え、え、やをやったことないんですけど日本で」
看護師さん「えー、そうなの？ おーい！（別の看護師さん呼び止めて）この子に導尿のやり方教えてあげて」
私「!？」

……という流れで、初めての導尿はシンガポールで

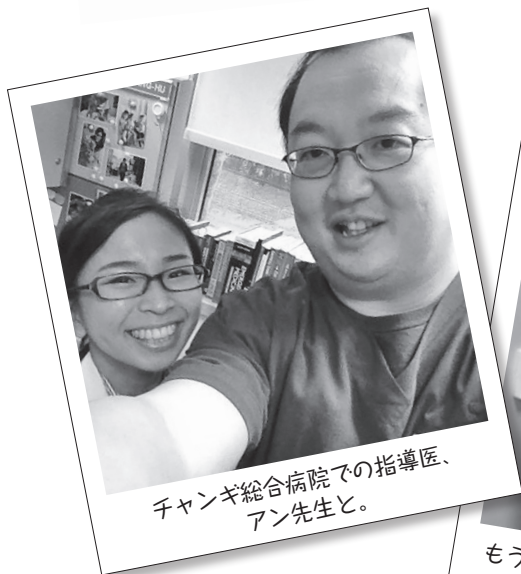
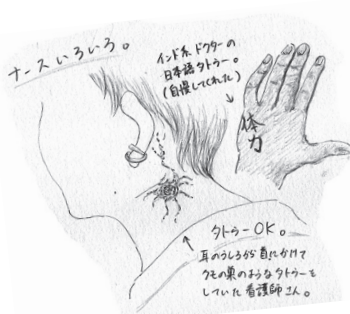
した。モタモタする私を看護師さんが気長に指導してくださり、大変有り難かったです。

教育熱心なのは、看護師さんだけではなく、指導の先生達の手が空くと、救急外来の片隅でミニレクチャーが始まります。医師も看護師も、採血などのちょっとした手技があると「やってみる？」と学生に任せてくれ、それも放ったらかしにせず、困っていたら助けてくれます。

学生に任せてくれる先生がいて、それを快くサポートしてくれる看護師がいて、積極的に挑戦する学生がいて、この有意義な臨床実習が成り立っていると実感しました。

●おわりに

海外での臨床実習に興味を持っている皆さん、ぜひ挑戦してみてください。私はこの臨床実習を通して、優秀な学生に出会えたこと、多様な価値観に触れたこと、そして何より自分自身の新たな可能性を発見したことが大きな収穫でした。留学するには英語も医学知識も中途半端な私でしたが、案外何とかなるものです。「できない」と思う前にまず一步踏み出す勇気を。この記事を読んで、「海外実習、やってみようかな」と少しでも思っただけであれば幸いです。本当に、楽しいですよ！



チャンギ総合病院での指導医、アン先生と。



もう一つの実習先、国立大学病院血液内科の指導医のエスター先生と。



チャンギ総合病院、救急外来。ここに救急車が続々とやって来ます。

マレーシア海外研修での学び

看護学科第4学年

塚 久美子



2015年8月3日から8月14日の2週間に渡り、私たち看護学科4年生3名は、マレーシア国民大学 (Universiti Kebangsaan Malaysia) で研修を行いました。

まず、はじめに訪問国であるマレーシアを紹介します。マレーシアは東南アジアの中心に位置し、国土面積はほぼ日本と同様です。赤道に近いので熱帯雨林気候に属しており一年を通して常夏の気候です。人口は約3000万人で、日本の人口の4分の1程度と日本と比べて人口の少ない国です。人口構成は6割がマレー系、3割が中華系、1割はインド系が占める複合民族国家です。平均寿命は2012年では男性は71歳、女性は76歳と、日本同様、女性の方が平均寿命は長いですが、高齢化率は5.2% (2012年) と日本と比べて高齢化は進んでいません。しかし、国の発展とともに医療の技術も進歩してきており、今後は高齢化が進んでいくと予想されています。国教はイスラム教ですが、宗教の自由を認めているため仏教やキリスト教やヒンドゥー教を信仰している人もいます。

次に私たちが研修を行ったマレーシア国民大学病院を紹介します。首都クアラルンプールから東南約35キロメートルに位置するマレーシア国民大学病院は1997年に創設されており、現在は病床数が約800床で、約13の診療科から構成されています。平均在

院日数は1週間以内と短くその背景には創設の翌年より開始された訪問看護サービスにあります。大衆向けの国立病院としては珍しいサービスで、このサービスを行っているのは国立病院では唯一ここだけだと、説明を受けました。私たちは、このマレーシア国民大学病院で2週間の研修を行いました。1週目は内科病棟と外科病棟の見学、2週目は訪問看護、精神科領域でのアクティビティに参加しての研修でした。

マレーシアでは現在、生活習慣病が増加しており、心筋梗塞や脳梗塞・糖尿病を惹起し大きな問題となっています。マレーシア国民大学病院でも、手術や入院の原因は生活習慣病に起因する疾患が多いと聞きました。その背景には1日5～6回の食事回数と、揚げ物・甘いものが多く野菜が少ない食事内容が挙げられます。しかし、宗教・文化や信条がそれぞれ異なるマレーシアの人々に、統一した健康意識を持つことは難しいと考えます。例えば、マレー系の人々は普段から間食する習慣があり、中華系の人々は普段から外食する習慣をもっています。また、中華系の人々では運動・健康に対する関心が他民族より高いとの報告もあります。長い時間を経て培われた食習慣・文化を変容していくことは容易ではありません。それぞれの民族が文化を踏襲し健康を維持・増進していく取り組みを根強く継続していくことが重要であり、そのために看護師が担う役割は大きいと感じました。医療を通し日本との文化の違いを深く感じるとともに、民族の持つ文化背景を把握し尊重しながら健康教育を行っていくことの難しさを痛感することができました



また、マレーシアには全国民を対象とした、医療保険制度はなく、ほとんどの人が民間の医療保険に加入している状況です。国立の病院では非常に安価で医療を受けることができるため、富裕層以外の国民は国立の病院へ行きます。マレーシア国民大学病院は国と民間の合同出資ですが、国立病院としての機能を持っており医療費は安価なので、非常に多くの患者を抱えています。そのため、早期に退院を促し訪問看護を行い、退院後の患者をフォローしていました。訪問看護師は医師や薬剤師・理学療法士などの立ち合いのもとで退院前の患者と家族へ退院後の調整・話し合いを行います、そして訪問看護では健康教育指導やカテーテル管理・褥瘡処置を行い、在宅で患者が安全に快適に過ごせるように支援を行っています。

私も看護師とともに患者の家に訪問させていただきました。その中で看護師の褥瘡処置や家族への健康教育を見せていただくことで、国や宗教や民族が異なっても看護師の患者に対する思いや患者家族が抱く患者への思いは不変であると感じました。

病棟での看護師も毎日、シーツ交換・寝衣交換を行っており、患者への一処置一手洗いを励行して清潔環境への配慮が行われていました。また、患者・家族に対してどの看護師もフレンドリーに笑顔で声をかけており、暖かな心遣いを感じることができました。

研修の日々、私たちをフォローしてくれた看護学生たちは、拙い英語の私たちの質問に真摯に受け止め回答してくれました。その学生たちの適切な回答を聞き、高度な看護教育が行われていることを知りました。また、彼女たちは現在の看護師の教育はまだまだ行き届いていないため、私たちがしっかりと学んでいく必要があると語っていました。その看護学生の気持ちにこれからさらに発展していくマレーシアの看護を垣間見た思いでした。

2週間と短いと感じる研修でしたがとても実りの多い研修でした。日本とマレーシアの看護の違いや、抱えている健康問題、今後の課題を知ることができました。また自分の価値観だけで、物事を判断せずに大きな視野で物事をみることや、他者を理解するためにその人のもつ背景や文化を理解しようとする姿勢をさらに意識した看護につながると感じました。この研修での学びを今後の看護に役立てたいと思います。



平成27年度 滋賀医科大学奨学金奨学生の決定

滋賀医科大学奨学金は、前年度の成績が優秀な第2学年以上の学部学生を各学科各学年から1名ずつ選出し、月額5万円の奨学金を1年間給付しているもので、わかあゆ夢基金および学生奨学支援助成金（企業、病院、個人からのご寄付）を財源としています。

平成27年度の奨学生は以下のとおり決定し、去る6月30日に中会議室において授与式を行いました。

平成27年度 滋賀医科大学奨学金奨学生

医学科第2学年	生野泰彬
医学科第3学年	渡邊敦子
医学科第4学年	本間俊佑
医学科第5学年	杉本裕史

医学科第6学年	原澤俊也
看護学科第2学年	谷次里美
看護学科第3学年	押谷咲季
看護学科第4学年	軈井かおり



奨学生からのひとこと

医学科第2学年 生野 泰彬

私は、推薦入試で一度失敗し、一般入試でもあまり優れた点数を取ることができず、入学してきた身です。そんな中で、このような名誉ある奨学生として選出いただけることをとても嬉しく思います。

選考の対象となった1年生の時、一般教養の講義がメインでした。全体として、医師になるにあたって必要のないものとして、一般教養が軽視される風潮があるように思われます。しかし、一般教養で身につけた様々な知識や価値観は、我々の血となり肉となって、将来、医師になるにあたって必ず生きてくるものだと確信しております。

また、一般教養の講義において行った種々の思考訓練は、医師の業務に限らず、様々な場面における解決能力を裏打ちするものであると思います。この場をお借りして、これらの機会を与えてくださった先生方にお礼申し上げます。

この結果に慢心せず、今後とも学友と切磋琢磨し、良い医師となるべく自己研鑽に励みたいと思います。

医学科第6学年 原澤 俊也

この度は、滋賀医科大学奨学金の奨学生に選出いただき、まことにありがとうございます。奨学生の名に恥じないよう、これからも一層の努力をまいります。

最終学年である6年生における選考基準は、「臨床実習における評価」と伺っております。臨床実習は、5、6人のグループに分かれて各診療科を廻り、勉強させていただくものです。ですので、個人の努力が評価されるというよりも、グループとしての力が評価されるものと考えております。よって今回、私を選出いただいたことは、グループ全員が努力した結果であり、私の独力では叶わなかったでしょう。その中であって、私が選ばれたことは、偶々の幸運であったと思わざるをえません。実習グループの皆様に、この場を借りて深謝いたします。

これまで、ご指導くださいました先生方、実習中に関わらせていただいた患者さん、及び他の皆様のご期待を裏切ることのないよう、もう目前に迫っております医師国家試験に向け、これから益々勉学に動しんでまいります所存です。

医学科第3学年 渡邊 敦子

この度は、滋賀医科大学奨学生に選んでいただき、ありがとうございました。

このような評価をいただけたのは、丁寧に指導くださった先生方、温かく見守ってくださった先輩方、友人など様々な方々に恵まれたおかげだと感謝しております。これからも、勉学・部活動に励み、このような機会を与えられたことへの感謝を忘れず努力していきたいと思っております。

改めまして、誠にありがとうございました。

看護学科第2学年 谷次 里美

この度は、奨学生としてご選出いただき誠にありがとうございます。大変名誉に感じるとともに、身が引き締まる思いです。

何事も初めはうまくいかない私ですが、先生方や先輩方、友人に恵まれ、素晴らしい環境のもとで勉学に励むことができている。滋賀医科大学で学べることを心から嬉しく思っております。

奨学生の名に恥じぬよう、より一層努力をまいりますので、皆様、今後ともご指導お願いいたします。

医学科第4学年 本間 俊佑

この度は、滋賀医科大学奨学金奨学生に選んでいただき、ありがとうございます。私は、入学前は病院薬剤師として働いておりましたが、患者さんと接するうちに、薬物治療以外にも患者さんのために行うべき治療、ケアがたくさんあると感じ、医学部を志しました。滋賀医科大学の授業では、最新の医学に関することから、医学の知識以外にも、医師としての心構えまで幅広く教えていただき、毎日、楽しく授業に参加しています。今回の奨学金は、将来の患者さんに還元すべく、さらに勉強するため、教科書などの書籍代にしたいと考えております。最後に医学部で勉強することに理解を示してくれる家族と共に勉強する友人、ご教授いただいた先生方に深く感謝いたします。

看護学科第3学年 押谷 咲季

この度は、本奨学金の奨学生に選んでいただき大変光栄に思います。現在は、驚きの方が大きく戸惑いもありますが、この2年間お世話になりました先生方や周りの友人、また、家族の支えのもと恵まれた環境で大学生活をおくることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

学生生活も折り返し地点となりましたが、今後とも周囲の人を大切にして、夢に向かって日々精進していきたいと思っております。改めまして、この度はありがとうございます。

医学科第5学年 杉本 裕史

この度は、滋賀医科大学奨学金奨学生にご選出いただき、誠にありがとうございます。このような名誉をいただけたことを、とても光栄に思います。また、普段から笑顔や刺激を与えてくれる学友、ご指導くださる先生方に深く感謝いたします。現在は臨床実習の身で、これまでの座学とは異なり決められた「正解」がないことに戸惑いつつも、患者の皆さんやスタッフの方々と接することで、医学・医療の奥深さに心ふるえる日々を過ごしています。

今後さらに精進を重ね、滋賀をはじめ世界の人々に貢献できる医師を目指していく所存です。

看護学科第4学年 鞆井 かおり

この度は、奨学生に選んでいただき、驚きとともに大変感謝致しております。入学以来3年間、多くの先生方にお世話になりながら講義や演習を通して勉学に励んでまいりました。また、臨床実習で受け持たせていただいた患者さんやご家族をはじめ、ご指導いただいた病院関係者の皆様や先生方、そして共に学んできた友人や家族の支えにより多くの学びを得ることができました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

学生生活も残りわずかとなりましたが、今後も周囲への感謝の気持ちを忘れずに、自分の目指す職業人に近づけるよう、向上心をもって努力を続けていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

ヨット部による追悼慰霊式

平成4年9月11日に、ヨット部のクラブ活動中に不幸にも琵琶湖で遭難した故 嶋岡 秀典さんの慰霊式が9月13日（日）の11時から管理棟 中会議室で行われました。

嶋岡さんの御家族、堀池副学長、OB 他関係者約40名が列席し、大学関係者の追悼の言葉が述べられた後、ヨット部主将の医学科第3学年 小杉 和希 君から部活の安全対策に対する誓いの言葉がありました。



2015年 嶋岡さん追悼慰霊式

医学科第3学年 ヨット部主将 小杉 和希

嶋岡さんの悲しい事故から23年、今年で滋賀医科大学ヨット部は創部40周年を迎えました。

滋賀医科大学は今年も西日本医科学生総合体育大会で入賞を果たし、3年連続入賞となりました。ヨットの技術や知識に関しては他に引けを取らないものになりつつあります。

しかし、滋賀医科大学が最も誇るべきは安全に関する厳重さであると思います。嶋岡さんの事故以降、このような悲しい事故を2度と起こさないように私たちは安全に対する意識を高め、安全対策を徹底して参りました。

その対策は他のハーバーでも参考とされるほど

です。しかし、今後もこれに甘んじることなく、安全を徹底し、無事故でヨットを続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、嶋岡さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。



堀池副学長による追悼の言葉



列席者による献花

平成27年度第1回学位授与式

去る 10月1日(木) 11時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。



■課程博士 8名



■論文博士 5名



■修士 3名



平成27年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに 平成27年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式

去る10月1日（木）10時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。

式 辞

学 長 塩田 浩平

本日ここに、滋賀医科大学へ学士編入学される17名、大学院医学系研究科へ入学される8名の皆さんを迎え、平成27年度滋賀医科大学医学科第2年次後期学士編入学および秋季大学院医学系研究科入学宣誓式を挙行できますことを心からうれしく思います。

医学科学士編入学の皆さん、滋賀医科大学への御入学おめでとうございます。ご家族の皆様にも心からお慶びを申し上げます。

滋賀医科大学では、第2年次後期に17名の学士の方を編入学としてお迎えしています。皆さんは、これまでに他の様々な分野で勉強や研究を行い、あるいは社会人としての経験を積んでこられたわけですが、その中で新たに医学・医療の道に進むことを目指し、このたびの編入学試験に合格されました。その決意と今日の喜びを忘れることなく、これからの医学の勉学に励んでください。医師には特に高い倫理観、豊かな教養と、それらに裏打ちされた優れた人間性が求められます。皆さんのこれまでの知識と経験が医療人になる上で活かされることを期待しています。

滋賀医科大学は、医学系の単科大学で医学科と看護学科をもっていますが、新しい医学教育・看護学教育によって信頼される優れた医療人を育成し、また、独自の研究と質の高い医療の実践によって医学・医療の発展に貢献しています。また、滋賀県で唯一の医学部であり、地域医療の中で中心



的な役割を果たす卒業生が増えています。

医学科の学部教育の目的は、医学・医療の進歩に対応した教育を授け、国際水準の臨床能力と優れた人間性を備えた医師・医学研究者を育成することにあります。皆さんは、これからすぐに基礎医学の講義と実習が始まり、そのあと、臨床医学の各科目を履修し、臨床実習を行うこととなります。医学の知識の体系は積み重ねが大事ですので、段階的に専門知識と臨床能力を獲得できるようにカリキュラムが構成されています。すべての科目を着実に修め、順調に進級するよう勉学に励んでください。

大学では、単に教えられた知識を覚えて試験に通ることが目的ではありません。医学・医療の知識の体系は膨大で、その内容は日々新しくかつ深くなっていきます。皆さんが将来、医師や医学研究者になっても、一生勉強を続けなければ、時代に取り残されてしまいます。そのためにも、大学では自ら能動的に学び、深く考える習慣をぜひ身につけてください。

本学には「研究医養成コース」がありますが、これは、将来医学研究を行う医師、すなわち研究医を目指そうとする学生の皆さんに在学中から研究に参加していただき、条件を満たせば奨学金を支給する制度です。これまでに、学士編入学の学生のうち比較的多くの方が研究に興味を持ち、この「研究医養成コース」に登録して研究を行っています。研究に関心のある方は、ぜひこのコースに参加してください。皆さんの学生生活が豊かで充実したものになることを心から願っています。

次に、平成27年度秋季大学院医学系研究科博士課程に入学された4名と修士課程に入学された4名の皆さん、ご入学おめでとうございます。

皆さんは、これからの2年間または4年間、医学と看護学の研究に従事して学位取得を目指されるわけですが、ぜひとも斬新で意欲的な研究テーマに取り組み、優れた成果を挙げて医学・看護学と医療の発展に寄与してください。医学・医療の進歩は目覚ましく、疾病の原因やメカニズムが次々と解明され、新しい治療法の開発も進んでいます。基礎医学と臨床医学の間の垣根も低くなり、優れた基礎研究の成果が画期的な医薬品の開発に結びつく例が増えています。その一つの例として、抗PD-1抗体を用いた抗がん剤が今注目されています。これは、本学の学外有識者会議議長をお願いしています本庶佑先生が20年以上も前に発見されたPD-1という分子の研究が基になって開発されたもので、従来の抗がん剤とは全く異なるメカニズムによって様々ながんを抑制する効果が見られ、画期的な抗がん剤として世界的な注目を集めているものです。免疫学の研究をしていた本庶先生のグループは、PD-1分子を働かなくしたマウスに自己免疫疾患様の病変が起こることに気づき、そのメカニズムを解析して、10年もの時間をかけて抗PD-1抗体の抗がん作用を発見されたのです。すなわち、癌研究とは直接関係のない免疫学の研究成果がもとになって、全く新しいメカニズムの抗がん剤が開発されたのです。

このように予想外の素晴らしい事実に気がつくまたは出会うことを、18世紀のイギリスの小説(The Three Princes of Serendip)に語源をもつ言葉で「セレンディピティ」と言いますが、これに関連して、ルイ・パスツールは1854年のリール大学学長の就任演説で「物事を観察しているときに、偶然は備えのある心(esprits prepares)にしか起こらない」と述べています。「備えのある心(the prepared mind)」は、自らの勉強と、それに基づいて注意深く考える洞察力があってもたらされるものなのです。皆さんも、これからそれぞれの研究テーマを掘り下げ、強い探究心を持って新しい研究成果を挙げられることを期待しています。

医学領域の研究は、自らの研究成果が病態の解明、新しい診断や治療法の開発に結びつき、看護学の研究は患者のケアやwell-beingに貢献するという、大変やりがいのある仕事です。しかしその反面、研究者には大変重い責任と高い研究倫理が要求されます。近年、医学と関連分野の研究の現場で起こったいくつかの事例がこうした社会の期待を裏切り、研究者一般に対する社会の信頼を大きく損ねたことは誠に残念であります。大学院時代は、研究能力を修得するための期間であると同時に、科学者としての素養と正しい心構えを身につけるための重要な時間でもあります。皆さんは、大学院の間に、優れた研究を行うとともに、科学者としての正しい生き方を身につけてください。皆さんの大学院生活が充実して実り多いものになることを願っています。

本日、滋賀医科大学へ学士編入学される皆さんと大学院医学系研究科へ入学される皆さんのご入学を心からお祝いし、今後のご活躍を祈念して、式辞といたします。

平成27年10月1日

後期学士編入学



■後期学士編入学 17名

平成27年度秋季入学者



■博士課程入学 4名

■修士課程入学 4名

第41回 解剖体慰霊式

去る10月22日(木)午前10時から本学体育館において、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員様及び教職員・学生合わせて約600名が参列し、厳かに第41回滋賀医科大学解剖体慰霊式を執り行いました。

このたびは、系統解剖53霊、病理解剖28霊、法理解剖95霊、計176霊を新たにお祀りし、御霊(みたま)のご冥福をお祈りしました。

慰霊式は、最初に参列者全員で御霊に黙祷を捧げ、諸霊芳名拝誦、塩田学長による慰霊の辞、学生代表の慰霊の詞、高橋しゃくなげ会理事長の献辞の後、参列者全員が献花を行いました。

最後に、ご遺族代表及び本学教授代表の小笠原教授から挨拶があり、閉式となりました。



黙祷の様子



塩田学長による慰霊の辞



出席者全員による献花

平成27年度 研究動物慰霊式

10月27日(火)午後3時から、滋賀医科大学研究動物慰霊碑前において平成27年度研究動物慰霊式を執り行いました。

慰霊式には、学長、副学長をはじめ114名が出席し黙祷を行った後、動物生命科学研究センター長の小笠原一誠教授、利用者会議議長の相見良成准教授より慰霊の辞が述べられました。

その後、出席者全員による献花が行われ、過去一年間(平成26年10月～平成27年9月)に実験に供された動物の御霊の冥福を祈りました。



献花の様子



研究動物慰霊碑

研究医コースのご案内

研究は案外身近で、おもしろい

ちょっとでも興味があれば、入門研究医コースに参加してみよう！

入門研究医コースは、基礎医学講座が研究活動の情報と場を提供して研究への興味を育てようとするもので、基本的に出入り自由です。

研究室の様々な活動に参加しながら、研究の基盤となる知識の習得や、研究の動向の理解に重点を置いた指導を受けることとなります。

研究室を選ぶために必要な情報は、1年後期の必修授業（医学特論・医学・生命科学入門II、2年生以上も出席可）で得ることができます。複数の研究室をローテートすることも可能です。また、他大学の研究医コースの学生と交流できるリトリート（研修会）等の機会もありますので、漠然と研究に興味がある学生でも無理なく参加できます。

入門研究医コースの期間は、学会や研究会への参加経費の補助も受けることができます。



本格的に取り組むなら、登録研究医コースへ！

登録研究医コースへの登録は第1～5学年のいずれの時点でも可能で、毎年2～3月と7月に面接やレポート等による資格確認が行われます。

興味のある研究領域に応じて分子医科学・病理学・法医学・公衆衛生学の各専攻を選択し、自分の研究テーマをもって実際に研究活動に参加することとなります。アドバイザーとして、指名された基礎医学講座の教授・准教授と、本事業専任の特任助教が研究について一から相談に乗ります。それ以外の基礎医学講座の教員の実験指導も受けられますので、効率的に研究を進めることができます。希望に応じて、複数の講座をローテートしたり、連携大学である浜松医科大学や三重大学に出向いて、幅広い研究手法を身につけることも可能です。



登録研究医コースの期間は、学会や研究会への参加経費の補助も受けることができます。また、大学院の講義の聴講が一部可能になります。

詳しくは、研究医養成コースのホームページへ (<http://www.shiga-med.ac.jp/kenkyui/>)

勢多だより

SETA DAYORI

「勢多だより」の由来

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢（いきおい）が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

(題字は、故 脇坂行一初代学長による)

2015年12月



編集後記

早いもので勢多だよりの編集後記を書き始めて7年が経とうとしています。後記を書き始めた年に入学された学生さんは、医学科であれば初期研修医、看護学科であれば卒後3年目となり、「医療文化」というサブ・カルチャーの構成員として活躍していることでしょう。

およそ学問とは「人とは何か」という問いかけにそれぞれの分野特有の方法でアプローチしてゆくものですが、学生時代にこうした豊かな学問的素養を吸収し、「人とは何か」という問いかけへの自分なりの道筋を持った上で医療を展開することが医学・看護学など実学分野の担い手には求められるように思います。

滋賀医科大学で学ぶ皆さんがこうした社会の求めに応えることのできる医療人として成長されることを願っています。

編集委員長 宮松 直美

勢多だより No.103

【発行年月日】平成27年12月22日 【編集】「勢多だより」編集担当者会議 【発行】滋賀医科大学広報委員会



滋賀医科大学

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。

「中心に向かって、外からさざ波の波動-これは人々の医への期待である。外に向かって中心から一隅を照らす光の波動-これは人々の期待に返す答えである。」

